
Scrap★py

杏野丞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Scrap★py

【Nコード】

N9495D

【作者名】

杏野丞

【あらすじ】

遙か遠いどこか。大きな戦争を終えたどこか。滅びかけたどこか……ココはそんな、どこかの星。国は、ない。秩序はとうに崩壊し、それでもまだ「彼ら」は生きている。政権回復をもくろむ代理国際政府の官僚と、軍人達。凶太くのさばる貧民街の売人に、諦めの中に生きるコロニーの住人達。そして大戦の“後始末”をする「破壊措置執行官」―――――生き残った負け犬共が掴み取る未来とは？

act・0【狂人ノ演説ヨリ】

なア、アンタさ。

例えば、例えば何だけどさ、何で目に付く所に屠殺場ってないと思う？

毎日まいにちマイニチ、食えるイキモノは肉塊に変えられてンのに、何で俺らはそれを見てないと思う？

答えは簡単だよなあ。俺らがそれを見たくないからさ！

見たくないモノは皆遠くに追いやって、見ても平気なモノだけで自分の回りに塀を作って、『世の中には辛い事も一杯ある』って言いながらぬるま湯につかつてる。だから時々塀の隙間から見える見たくないモノに、アンタは寒気とか嫌悪感を感じたりするんだ。

なア、アンタだってそうだろう？ そうなんだろう？ 屠殺場で潰される豚なんか見た事ないんだろ？

まア、そんなモンみたら下手したら肉食えなくなるかも知れないしなア。

だから俺達はそれを無意識に全力で視界と思考から排除してる。

だけどさ。

それをアンタのためにやってくれる奴もいるんだ。

偉いよなア。きっと悲しいよなあ。

生まれた頃から知ってるソイツを、自分の育てて来たソイツを殺して、『食べ物最初から死んでるモノだ』なんて思ってる豚野郎

に送ってやんなきゃいけねえんだ。

そんな理不尽なお仕事を、何度も何度も何度もしなきゃいけないんだぜ？

みんながそれを求めているからなア。

だってほら俺ら、汚れたくねえし。鶏の首絞めてフライドチキン作ったり、豚の腹さばいてポークカレーなんか作れねえし。

なのにオイ、何だよこのザマは。結局それを押し付けて置いて、その事実に関心もなかった事あるか？

考えないお前の変わりに、お前の出してた無言の圧力って奴の正体を考えてやるよ。

ソイツは今もふてぶてしい面を晒しながら嗤ってるぜ。『俺の変わりに汚れ役を買ってくれてありがとう』ってさア。

なア、忘れんなよ。アンタがそれを求めるから、アンタの変わりに手を汚す奴がいるんだ。

自分は何かの犠牲の上に生きてる、なんてオベンチャラなんだろう？ 必死に耐えてる誰かの体を、汚れた意思で踏み付けて歩いて行くアンタの靴は、今も綺麗なままなんだ！

act・1【詰所にて】

「二百六番の十五頁、B項目だ。取り敢えずで良い、ざっと目を通してけ」

「了解ーっす」

疲れた顔をした事務員から分厚い記録帳簿を受け取りつつ、青年は答えた。

相手が自分より上の役職だと知っていても、彼は決して敬語と言う物を使わない。使えないに近いと知っている事務員が殆んどだから咎める者もごく稀だ。

パイプ椅子ではなくデスクの縁に腰掛けて彼は左手で指示されたページを開いた。

空いた右手は無意識に日に焼けて色褪せた己の毛先を弄んでいる。元々淡かった金の頭髮が更に白髪じみた色になって久しい。大気処理装置の劣化により上層のオゾンが薄れると、太陽に接近する時期ではないのに紫外線照射量が格段に増え、さらに乾季も長くなる。それが原因でこんな症状が起ころのだと、百年ほど前の科学者が提唱していた事を彼は記憶していた。

百年、その時の流れは大きい。『栄華の時代』が『破滅の時代』に切り替わるには充分すぎる時間だ。

とは言え彼はそんな事など、あまり興味が無い。産まれた頃には既に時代は移り変わっていた。そして今、彼の目下の関心は今手にしている記録帳簿に注がれている。

文書は苦手だと嫌がる男が、今日はまた随分と真面目に読んでやる。そう思った事務員の男は、チラリと開かれた帳簿を覗き込んだ。

途端に顔をしかめたのは彼でなくとも当たり前だったろう。

「……おい馬鹿。その頁じゃない、十五頁つつったろ」

「あ？ あー、ハイハイ」

適当な合図打ちを返しながらバラバラと乱暴にページをめくる。
一応これは公的文書に当たるのだから大切にしてくれよ——そう言う気すら事務員はなくしていた。

この青年のやる気のない顔はいつもの事で、更に人の話を右から左に流すのもそうだ。小言が何も効果がないという事くらいすぐに分かる。関わるだけ労力と力の無駄だ。

回りを巻き込む無気力を腹立たしく思いつつ、彼は言葉を吐き出した。

「コレ読んどかねェと任務先の状況とか分かんねえだろ、ちゃんと目エ通しとけよ、全く……あえてお前みたいなのを呼ぶなんざ、管理官も相変わらず変わり者だな」

「知ってら。こんな変わり者の部下持つのは変わり者の上司だけッスから。あ、本部から左遷させられた人なんだけど、アンタ話した事ある？」

「……とにかくちゃんと読めよ。後でとやかく言われんのはご免だからな」

「あいよ」

去り際に大袈裟なため息を吐いた男に青年は振り返りもしなかった。

彼のこんな態度はいつもの事で、慣れ切った周囲の者はすでに注意する気力をなくしている。本人がそれに気付いているのかすら分からない。最も気付いていてほくそ笑んでいるのかも知れないとは、幾人かが思っていた。

しかしうつ向いて帳簿を読む顔はあくまで真剣だ。彫りの深い眼下に落ちる影のせいで淡いアイスブルーの瞳には暗い影が落ちている。

そして額どころか目さえ隠す程に長い前髪が、その顔に落ちる影をより濃くしていた。

影の奥にある瞳はまだ二十歳になるかどうかと言う見た目の年齢に反して、鈍い光を灯している。

それは諦めを知っている老いた男の光だ。

ボンヤリとした表情の中で異質に映る、そんな輝きだった。

ガサガサした安っぽい帳簿の角は折れ曲がり、今にも破けてしまいそうだ。

青年は眉間に縦皺を寄せながらページをめくった。確かに帳簿に書かれている事は重要事項だが、そう険しい顔をして読む程の物ではない。つまり苦手なのである。文章を読むと言う事が。

大雑把な教育しか受けて来なかった彼に取って、きちんと書かれた文書という物はある意味強敵だった。

タイプ型式の書面から書き手の心情は読みづらいが、この帳簿を記した者がこれを書く事を苦にしていなかった事は彼にもすぐに分かった。安い給与の雇われ事務員にしては内容がしっかりしている。何より報告の端々に書かれた日記のようなものがそれを明確にしていた。

ふと、そのページの隅に手書きの一文がある事に彼は気付いた。万年筆だろうか。藍色のインクで書かれた、読みやすい滑らかな書体の文章だった。

“子供の頃の夢を見た。保護区域で生きていた頃の夢だった。

足の腱が千切れるんじゃないかと思うくらい走った。奪うために走った。逃げるために走った。生きるために走った。そんな走ってばかりいた頃の夢だった。

その頃の俺は子供らしい盲信で、走って走って、辿り着いたその先なら平和に生きていけるんじゃないかと、そう感じていた。

それは勘違いだと気付いたのは一体いつだったか。

結局俺はまだ走っている。戦いの終わった筈の戦場を、死にもの狂いで走っている。

足の腱はまだ、切れていない”

手書きの文章はそこで終わっていた。

他に似たような走り書きはない。

だが、たったそれだけの文章に、ある種のデジャウを青年は感じた。言葉はあくまで漠然としていて、自分が感じる感覚とは少し違っている、とも少しは思ったが。

この言葉は嫌いな類いの物ではない。

自分と近しい事を思った者がいたと言う事実をなぜか嬉しくも感じ——だからこそ、この文を書いた者が哀れだと、青年は目を伏せた。

この諦めと僅かな期待が入り混じった表す言葉が見付からない感情は、報われない事を知っている。

それともこれを書いた者は報われたのだろうか。想像もつかない事だ。

そこまで考えて、彼はふと我に返った。

どうでも良い事だ。他人が報われようが自分が報われようが、この世界に救いはない。

それでもこの手書きの一文には惹かれる物があった。

「……詩人だねえ、『足の腱はまだ切れていない』、か」

「イルクルツソは一度自分で作った詩集を姪に送っている。少し変わった男だった」

独り言のつもりが返事があった事に驚いて、青年は振り返った。

その表情からはすでにあの鋭さが消えて、少し気の抜けた何時ものそれに戻っていた。

青年の言葉に答えたのは、黒髪の冷めた目をした、一目で軍人と分かる女だった。目鼻立ちのはっきりした顔も童顔の多いアジア系にしては幾分整っていたが、かえって彼女の無表情きつい印象に見せている。

青年は彼女の事を良く知っていたから、その表情以上に彼女の性格がきつい事も知っていた。

「なんだシン上官か、ビビらせんで下さいよ。つか上官、コレ書いた奴知り合いつすか」

「B項目は読んだか、クライム」

女は青年の質問に答えなかった。

クライムと呼ばれた青年は一瞬眉根を寄せたが、諦めたように立ち上がった。

彼は自分の上司である女より、頭一つどころか二つ以上も背が高い。クライムが抜きん出て大きいという訳ではない。シンが非常に小柄な部類に入るのだ。

それなのに発する威圧感は彼女の方が遥かに勝っていた。

黒目がちな瞳は猛禽類のそれに似ている。冷たく冴えきったそれは硝子玉のようで感情が見えない。風を切って飛ぶ時の鳥の目。獲物を見定めた事を気付かせない、殺気を秘めた鳥の目だ。

その瞳はクライムではなく彼が手にした記録帳簿を見ていた。

「まあ、読みましたよ。カンケーあるところからカンケーないところまで」

「ならすぐに行くぞ。仕事だ」

内容も告げないまま命じて彼女はボロ封筒を投げてよこした。任務の給与、その半額分が入った封筒だ。

「あれ、何時もより薄いつすね」

「ああ」

「今度近くなんすか？」

「いや」

「じゃあどこで」

「第四十一保護区域」

「……そこ確かムチャクチャ遠い所じゃねッスか？」

「ああ」

この上司と冗談を交えた楽しい会話など出来る訳もないのだと気付いて、クライムはあからさまなため息を吐いた。

それもまた、何時もの事だ。

彼女はいつも最低限の命令と情報のみを部下に伝える。そつなく素早く仕事を遂行しろと、そんな事を求めたりはしない。

要は与えた仕事をこなささえすれば良いからだ。その為に『やらなければならない事』と『やってはいけない事』だけを説明する。

仕事の出来る人間を育てる気など皆無だ。それでも成り立つ環境に誰しも甘んじている。

「んでシン上官、内容は？」

「何時もと同じだ。“スクラップ”——破壊対象一機、想定期間七十五時間。処置完了まで帰還認めず、ただし死傷者発生の場合一時回避可。自動式重機甲兵器は壊せ。人間は殺すな」

オールド・オート

「りょーかい」

酷く軽い調子で仕事の会話は進められていく。仮にも国際機関直通達の任務をこんなこの馬の骨とも分らない者に任せるとは、中枢部の役人達は何を考えているのだろうか。

実際、何も考えちゃいないんだろうさ——それが青年、クライムの見解だった。

でなければ彼自身、ここで働ける訳がないのだ。

「あそこは今乾季だ、クライム。夜は冷える」

思い出したように、低い声でシンは呟いた。とはつまり、夜まで任務をするつもりでいると言う事だ。

言葉少ない上司の一言からその裏を察する、そういう癖がクライムには付いていた。

「マジっすかい。面倒くせえな」

「ぼやく気力があるなら上着を持っていけ」

「わーかってますよ!」

椅子の上に投げていたジップアップブルゾンを取り上げる。それは初めての給金と共に政府から与えられた唯一の物だった。

目立つ上腕部に縫い付けられたエンブレムには、丸く伸びる梢がデザインされている。

世界の復興と再生と言う、いかにも世界政府らしいロゴマークだ。『我々の手で掴む未来という希望、その象徴』という演説を教習ビデオで見せられたその日から、クライムはこのマークを剥ぎ取った。いほど嫌いになった。

壊れてしまったなら——いや、この星の全てを壊したのは自分達だ。

それならいっそ、また全て一から作る事を考えなければいけない筈だろうに。

過去の国、体制、技術、それにまつわる昔話は戦時中に生まれたクライムにとって夢より遠い幻想だ。それなのに、その過去にしかない栄華というものに囚われてまた昔の政策を参考にしようと言う中枢の人間達が彼には理解出来ない。

それでも彼はその下で働いている。

生きるためには取り敢えず金を稼いで、水と食料と寝床を得なければならぬ。そのためにはドラッグクイーンとして働こうが、闇市の露店商として働こうが、政府の犬として働こうが、どれも変わりはない。はしなかった。

望まない場所でも生きていけるという自信と意思がなければ、きっと彼もすぐに死ぬのだろう。

今の世界は誰にでも平等に冷酷だ。

“――ああ、くそつたれ”

何に對してでもなく、クライムはそう思った。

生きて行く場所を選べない人間がこの星の大半だとしても、このやり切れなさは何なのだ。政府の手となり足となり、要らなくなれば破棄される都合の良い使い捨てが、それを考えること自体馬鹿馬鹿しいのだろうか？

任務は命に関わる事も少なくなかった。しかし、それでもクライムは上層部に異議申し立てを、などと奮起したことはない。同僚達も皆そうだ。

何もしないのは、彼には何もないから。守る者も養う者もない、目的も希望もない。

彼は、そんな人間ばかりが今の世界を支えている事を知っている。

――その内耐えきれなくなつて滅びるのかもしれないねーよな、いつか、その内。

エンブレムを睨み付けながら、クライムはブルゾンに袖を通した。厚手の肘当てがそろそろ破れかけている。縫うのは面倒だなど思ひながらクライムは椅子に立て掛けていた一振りの剣を掴み上げた。同僚にはいくらなんでも時代錯誤だと笑われるが、彼にはこれが一番使いやすい『相棒』だった。

チラリと小柄な上官を盗み見れば、彼女もいつもように一振りの刀を背負っている。

黒い髪と目に合わせたかのような黒い造りの刀だ。

あまり気の合わない上司と部下の唯一と言つていい接点がこれだった。

それを笑える者は誰もいない。彼女がその刀でオード・オートではなく人を縦に裂いた事があると、皆噂で知っているからだ。

問題の噂が真実なのかどうかクライムは知らない。聞く気もなかった。

「準備は」

「オーケーっすよ」

ベルトに通した革の留め具に鞘を通す。腰にのしかかる重みは既に馴染み深いものになっていた。心にのしかかる重みもまた同じであるように。

砂嵐で薄汚れた窓の向こうに赤茶けて渴れた大地が見える。今は乾季だという保護区域もこんな様子なのだろう。もっとも、あそこは『灰色の世界』だが。

とりとめのない思いの向くままに口笛を吹きながら、クライムは待機室のドアを開いた。回廊に響く口笛は調子っぱずれなハレルヤ。機嫌の悪くなったシンに刀の鞘で殴られるまで、彼はずっとそれを吹いていた。

使い捨ての犬としての一日が、また始まった。

act・2【アンダードッグス】

大地は酷く乾いてひび割れている。

その更地と化しつつある地上を遙か下に見る、枯れた木の上に少年はしがみ付いていた。

彼は些か重装備に見えなくもない大きなゴーグルを着けている。

首都の若者がするような格好つけのためではなく、それは実用品だった。

薪束を作るために枝を落とすと少なからず木片が飛んで危険である。それでなくとも風が吹く度に小さな砂が舞い上がり、ふとした瞬間に眼球を傷付ける事があるのだ。点眼薬はそこそ値が張る。たかが子供のお使いに持たせて貰えるような代物ではない。

だが、この十メートル近い木の上で視界を失うのは命取りだ。事実、それで死ぬ者がある程なのだから。

赤茶色の砂が音を立てて風に舞う。

砂嵐は乾期特有の弊害だった。

だからコロニーから外れた保護区域に入る時、必ず“彼等”は気ろ過マスクと防護用ゴーグルをまとめて買って行く。

それは闇市の売り上げに少なからず貢献していた。

だからこそ売人は“彼等”の到来を待つのだ。国際政府とは何時まで立っても折り合いが着かない貧民街スラムの住人達も、“彼等”の到来は否定的に受け取らない。利益になるからと、むしろ歓迎している者もある。

少年は木の上で“彼等”を待っていた。

燃料となる薪を落しながら“彼等”を待ち、その到来を売人の父に告げるのが少年の仕事だ。

昨日、一昨日、その前の前の前……と、随分長い間その仕事は無駄に終わっていた。一日の終わりに湿った布で体を拭く度、日に焼

けた肌が鈍い痛みを訴えて虚しさを増長させたものだ。

だが今日、少年の努力がやっと報われる日が来た。

少年は見付けたのだ。

遙か遠く、どのコロニーからも外れた西の大地を走る小さな土煙。それは待ちに待った“彼等”の到来だった。

「……よっしゃ！ 来た、破壊措置執行官だ！」
スクラップバー

少年は思わず叫んでいた。枝落としての刃を背にくくり付け、急いで幹を滑り降りる。

一目散に少年は父親の働く闇市へと駆けて行った。

余談だがこのコロニーにもこういう仕事を任された子供が幾人もいる。だから車がその街へ着く頃には、彼等が探している物とはとつくに準備出来ていると言う訳だ。

しかし執行官者達がそんな事を知るよしもない。

今回、土煙を上げてやって来た彼等もまたそうだった。

照りつける日差しの下。日光を存分に浴びたジープ内部の気温は高い。

じわじわと滲み出る汗を拭いながら、助手席に座る男がぼやいた。
「あー、ダメだあっちい。やっぱ使い古しのジープだと凄いつすねー、砂埃。全ッ然防げてねえや。外と変わんないんじゃないかねえすか？

あーヤダヤダ、あちい」

「嫌なら降りて走れ」

抑揚のない硬質な返事はだいぶ乱暴だった。

運転席の女は勢い良くハンドルを切る。言葉よりも行動はさらに乱暴だった。舗装されていない道に激しくジープが跳ね上がったのだ。

慌てて男は座席にしがみついた。危うく窓を突き破って外へ放り出される所である。

「あ、危ねえっ！ 安全運転して下さいよ！」

「充分まともに運転してる」

大概危ない運転に見えるが、跳ねてしまうのは道路に散乱する枯れ木やコンクリートの破片のせいだから仕方ない、と彼女は言いたかったのだろう。フロントガラスの先に伸びる『国道』は、果たして本当に道なのかと疑う程だ。今しがた空爆でも遭ったのかと思っ
てしまいうくらいに平野と道は荒れ果てた様相なのだから。

しかし助手席に懸命にしがみつくクライムは知っている。

この女軍人は酷く運転が荒いのだ。車が跳ねるのは仕方ないが、他の同僚が運転する時の二倍は車体が跳んでいる。

「せめてスピード落として！ 任務前に死ぬ！」

「さっきも言った……嫌なら降りて走れ」

剣呑な口調で低く吐き捨てたシンの表情を見て、クライムは文句を言う事を止めた。

「……お断りしときます……」

この上司は、機嫌が悪くなるとすぐこれだ。元々高くない声が一
段と低くなり、その上眉間に寄せた皺がその不快感を露にしている
のだ。

いくら気がきかない部下でも気付けない訳がない。

不意にジープのスピードが急速に落ち始めた。ガタゴトと石を踏
みつける音が車内に響く。

確実に、その音の間隔が長くなっていく。ついにエンジン音が激
しく咳き込むような物に変わった。

「ん」

「あれ？」

激しい響きは唐突に止まった。おまけとばかりにその動きも――
つまり進行も止まった。鉄の箱と化したジープの中に束の間の沈黙
が満ちる。沈黙の中にクライムは少し嫌な予感を抱いた。

ジープが止まった理由は大方予想がつく。問題はその先だ。

沈黙を破るようにぼつりとシンは呟いた。

「ガス欠だな」

「そつすね。……ガソリンは？」

「ない」

簡潔な言葉の先に見えるのは『徒歩』の二文字以外に無い。

よりにもよって任務の前に炎天下の乾期の大地を、まさか歩いて行く羽目になるとは。考えただけで目眩がしそうだ、クライムは大げさなため息を吐いた。

ともあれ、今や動かない箱となったジープに座っていた所でどこにも行けない。

歩かなければ、保護区域どころかコロニーにすら辿り着けないのだ。

諦めも早くさっさと荷物をまとめてジープのドアを開けた上司に気付いて、面倒くさがりの部下は呆れたように呟いた。

「よくそんな、さっさとジープ諦められますね。どっからそんな気合い湧くんすか」

「ここでも外でも、どのみち暑い」

そら、という掛け声と共に、シンはガスマスクによく似た気ろ過マスクをクライムに投げて寄越した。

手早く装着した上官に倣って、問題児の部下も渋々従う。

ドアを開け外へ出ると、乾期特有の乾いて熱気と強い日差しが脳天から突き刺さった。時々風に砂が混じるので、服からは絶えずパラパラと弾けるような音が響いている。

足を踏み出すたび、ブーツの下で乾いて砂利のようになった土が割れて崩れた。脆い感触は丁度今が乾期の盛りである事を示している。

大地はどこまでも渴いていた。

視線を上げれば小さな粒の塊にも見える建物の集合が見える。まだ十キロくらい先にあるのだろうが、それは確かにコロニーだ。

そして、そのまた遥か向こう、渴れきった大地の奥に蜃気楼が見えた。

揺らめくそれは灰色の壁だ。

青空と大地の境に線を引くように、壁がそびえ立っていた。

ユラユラとうごめくそれは曖昧なようで、それでも確実に彼方に存在している。

——そこか。

シンはレンズ越しにその揺らめく壁を見詰め、再びクライムに振り返った。

「もう見えるな。四十一区域だ」

指差した先に揺らめく物を確認してクライムは頷いた。

そして目的地に辿り着くためにはやはり歩かなければならない事を知ったのだ。

「ああ、面倒くせえ……」

悪態は何に対してついたものなのか、多すぎて彼自身にも分からない。

照りつける太陽は嘲笑っているかのようだ。

しばらくしてスクラッパー達が徒歩で炎天下の大地を歩くという苦行をどうにか達成した頃、コロニーでは新たな苦行を背負う者が誕生していた。

闇市の片隅の店、乱雑に積み上げられた工具や機械の部品の前で一人の少年が大柄な男に怒鳴られている。

ジープを見付けて街に走って行った、先ほどの少年だった。

「だから親父、オレ本当に見たんだってば！ あれ絶対、スクラッパーだった！」

「大方砂が吹いてたのを見間違えたんだろ。全く、いらん手間取っちゃまったじゃねえか！」

馬鹿ガキが、との罵声と共に父親の拳が少年の頭に振り降ろされた。

全く手加減しなかった事が伺える鈍い音が響いて、聞いていた幾人かが思わず首をすくめた。

痛む頭を押さえてのたうちまわり、それでもなお少年は父親を睨

み上げている。

自分は確かに見たのだと、そう確信している目だ。

「み……見間違いでも嘘でもない！ あれは絶対スクラッパーのジープだったもん」

一向に引く気配を見せない様子に、父親は呆れてため息を吐いた。子供とは妙な所で頑固だ。

しかも面倒なのは、本当に自分に非がないと思っている場合がある、と言う事なのだ。

今回の場合はそれに当たるらしい。

そう思って心底億劫な気持ちを味わいながら、父親は少年に向き直った。

「あのな、じゃあなんで小一時間立ってもスクラッパーが来やがらねえんだ？」

「それは……！」

「平野からここまでジープなら三十分もかからん。来ないって事はないって事だろうが。大体な、お前はいつもそのそそっかしい所が――」

その説教が始まった瞬間だった。

「あー、おっさん。取り込み中悪イけどさ、えーとマスク用の気ろ過フィルター八枚と紫外線防止用ゴーグルのラウンドタイプレンズの代え八枚とウォーターパック四袋と、あとガソリンとエンジンオイル用意できないか？ 出来たら今すぐ」

「……あ？」

親子の会話など完全に無視した身勝手極まりない注文に、苛立ちを隠す事もなく男は振り返った。

だが彼はその途端に、ポカンと口を開けて固まってしまった。

そんな父親の様子に少年もお客へ振り返る。次の瞬間、少年は明るい声を上げてその男に駆け寄っていた。

お客の様相はさながら灰を被った猫。砂にまみれた服や頭髮は白

つぽく粉を噴いたようになってる。身なりは随分と憐れなものだ。しかし唯一の救い――少年とこのお客に取ってのだ――だったのは、砂でその印が隠されなかった事だ。

彼の上腕にあるその印を引っ掴んだ少年は、父親に向かって優越感の隠し切れない笑みを浮かべる。

「ほらな、オレの言った通りじゃないか、スクラッパ―だよ！」

嬉々とした少年の言葉に父親は頷くしかなかった。

汗だくで埃まみれの何とも憐れな体ではあったが、破壊措置執行官のエンブレムを付けた青年がそこにいたのだから。

かなりの疲労と困惑の色が見える苦笑いを浮かべて、青年は頭を掻いた。

白金の髪からパラパラと砂が零れて肩で跳ねた。

「あー、うん、そりゃまあスクラッパ―だけだよ……ないのか？
品物」

「あ――ああ、大丈夫だ。すぐに用意する」

青年の言葉の意味に気付いて、男は慌てて店の奥に消えた。

暫くの間、少年はその青年のエンブレムを掴んだまま、物珍しげにそれを見詰めていた。

「……珍しがんのは構わねえけどよ、お前そろそろ放せ。暑苦しい」

「あ、ゴメンな兄ちゃん！……オレ、こんなにじっくりスクラッパ―のエンブレム見たの初めてだからさ。へえー……こんななんんだ」

「そうかよ。んじゃもう目いっぱい見たろ。離せよガキ」

うんざりした様子を隠しもせず突っぱねた青年に、少年はムツとした表情になる。

失敬な、とばかりに少年はスクラッパ―の腕を力一杯殴り付けた。バシン、と言う音と共にブルゾンの袖から砂埃が舞い上がる。それに咽かえったのは、残念ながら少年自身だった。

「ダッセえ！　コロニーに住んでる人間がコレくらいでむせんなよ！」

ゲホゴホと咳き込む姿を見て青年は高らかに笑う。無論少年の自尊心を傷付けるためにだ。

なんて大人気ない男だと、少年は咽ながらも彼を睨み付けた。

「う……うるさいなあ！ 大体なんでそんな砂まみれなんだよ！？ スクラッパ―なら、軍のジープ乗って来たんじゃないのか？」

途端ムツとした表情になった青年を見上げ、少年は気まずそうに軽く身を引いた。

以前にもこのようにお客の気に障る事を言って、貴重な売り上げを台無しにしてしまった事がある。

あの時は本当の意味で痛いくらいその責を思い知らされた。絶対にもうそんなヘマはしない——そう思っていたのに、またやってしまった。

振り降ろされる父親の拳を思い出し少年は身震いした。このお客もまた怒鳴り散らして別の店へ行ってしまうのだろうか。

だがスクラッパ―の青年は頭をバリバリと掻きながらため息を吐いただけだった。

「政府のお下がりはいーんな妙なトコで使えねえんだよ——車も、上司も」

少年はポカンと口を開けて固まった。

仮にも世界政府のお抱え機関の人間がそんな事を言う等とは思ってもみなかったのだ。

なんだコイツ、自分だって政府の下っ端のくせにさ——。

少年は思わず近所の知り合いと話すのと同じくらいの気軽さで、言葉を返してしまっていた。

「だろうね。政府に期待しすぎちゃいけないんだ。親父もそう言ってたぜ、兄ちゃん」

「なんだ？ お前ガキのクセして良く分かってんじゃないか」

ニヤリと喰えない笑みを口の端に浮かべた青年に、少年はつられて笑った。

「兄ちゃん、なんか今まで来たスクラッパと違うなあ。変わってら」

「へエ、そうか？ んじゃあ、今まで来た奴ってどんなんだ？」

「いかにも『政府の犬』って感じ！」

バウワウ、アオーン！

犬の鳴き声を真似て、少年は地べたに転がった鉄屑を蹴った。硬質で微かな音は一瞬で砂埃の中に消える。

一際強い風が吹いて、コロニーの誰かの家から飛んだのだろう、白い布切れが空に拐われて行くのが見えた。

少年はひび割れた大地だけを見ている。

浅黒く焼けたその顔は、笑っていない。

「オレは、アイツら嫌いなんだ」

クライムに、と言うより、過ぎたその思い出に語っているような口振りだった。

「おんなじコロニー上がりの田舎者のクセにさ！ 『政府の命令』とか『我々の権限』とか言って、バカじゃねえの。そんな理屈が無法地帯で通るかっての！ 金がなけりゃメシは食えねーし、女だってよっぽど羽振りが良くなきゃ娼婦だって寄り付きやしないっつうのに……でも、前来たのは、本当のバカばかりだったからさ。好き勝手にやな事してっただ奴だって、いっぱいいるんだぜ？」

「へエ……」

「金払わないで品物出せなんて未だにザラなんだ。オレの姉ちゃんも隣のコロニーに嫁に行くまで変な管理官に付き纏われて困ってたし……バカなんだよ結局。偉いのはお前じゃないって、気付きもしてない。政府の仕事ができてさ、あいつらバカなんだ、マジで」
並々ならぬ因縁があるらしい。

少年は遠い虚空を見詰めて苦々しく唾を吐いた。クライムは苦笑いでそれを見ている。

不意に、彼は踵を返した。褪せた金の髪が風に踊る。

「まあな……スクラッパ―はな、バカな犬じゃなきゃ出来ねえんだよ」

「え？　――あ、ゴメン、兄ちゃんの事言ったんじゃねえよ？」

「大して変わんねえよ、俺も」

存外に静かな声に、少年は思わず振り返った。梢のエンブレムを腕に着けた青年は後ろを向いていたから、彼はその時の青年の顔がどんなものだったか、知る事は叶わなかった。

ふと、物音がしてクライムは店の奥に目を移す。

荷物を乗せた木箱を抱えて、店主が奥から戻って来たらしい。

「おおいキール！　重いモンが多いんだ、ちったあ手伝え！」

「う、うん今行く！」

重たいオイル缶を足で押し出しながら叫ぶ父親の声に、少年は慌てて暗い店内に駆け戻った。

一度ちらりと振り返って見たものの、スクラッパ―の男はそっぽを向いたままで顔は見えない。

「ガソリンとエンジンオイル、あとはゴーグルのラウンドタイプの妨紫外線レンズ、ろ過フィルター、ウォーターパックと……あーなんだった？　あとなんだ、スクラッパ―！」

「オーケー、それでバッチリだ」

後ろ姿のまま彼はヒラヒラと手を降って、“あ”と小さく呟いた。くるりと振り返った気さくな笑顔に白金の長い前髪が揺れている。

その笑顔が、彼の顔にただ張り付いているだけの物のようにキールは感じた。何故なのか、そんな気がしたのだ。

「あとな、風呂。借りれる所ってあるか？」

「あるにはあるが……今は乾期だ。少し高いぞ？」

「まあ、そーゆー時こそ経費で落とすさ、スクラッパ―だかな」
小賢しげな笑みで口元を歪めて、クライムは頭を掻いた。思い出したようにパラパラと砂粒が零れる。

「こんなナリで仕事ができるかってんだ。ガス欠するような車渡し

てきやがったのは本部あっちなんだぜ……まあこれも『必要最低限の準備』
ってヤツになんだろ」

四日ぶりの風呂だなと嬉しそうに呟いたスクラッパの言葉を聞いて、思わず少年はゲツと声を洩らした。

またしても父親の拳が振り下ろされたのは言うまでもない。

act・3【書き記されない、デッドエンド】

簡易便所のような狭苦しいシャワールームのドアが開いた途端、乾いた風が肌に残る水滴を攫っていった。

シャワールームから繋がる脱衣場と呼べなくもないあばら屋は、どこもかしこも隙間だらけだ。吹き込む風はもはや“隙間風”と呼ぶには強すぎる。

熱いこの時期涼しい風はありがたいが、どうやら風は砂混じりだ。サッパリ出来たのも束の間、砂が身体にまわりつかないようクライムは慌てて身体を拭く羽目になった。

「あーもー、全くよお……！」

褪せた金髪は濡れたままだが彼はバタバタと服を着込んだ。

しかし時既に遅し。ボロボロの肌着を来た瞬間、背中にはザラリとした砂の感触があった。

——やっぱりそうなるか。

多少ガツカリしながら、クライムは肌着の内側を木綿の布でまた拭った。拭く側から汗が滲むのは茹だるような暑さに支配された乾期だからどうしようもない。

苛立ち混じりに犬が水気を振り払うようにガシガシと乱暴に頭を拭っていると、唐突に脱衣場のドアがガンガンと派手な音を立てた。「スクラッパーの兄ちゃん！ タオル、あれで足りた？」

変声期前の少年の声。どうやら先程のバイヤーの息子——キールらしい。聞き覚えのある声だった。クライムは戸に向かって答えた。「あー、足りた」

「分かった。んじゃ、使ったヤツと洗い物があればその簞にブチ込んでいて。後で持ってくるから」

「あいよ」

やる気のない返答だったから、キールはすぐ立ち去るだろうとクライムは思った。

だが何故か、その気配は戸の前から動かない。

「……なんだよ、ガキンちょ。パチって金になるようなモンなんざ俺は持ってねえぞ」

ため息混じりに呟いた言葉に、抗議するように戸が鳴った。

揺れ具合から察するに、どうやらキールは脱衣場の戸を蹴飛ばしたらしい。

「ちげえよ！ ちょっと聞きたいんだけどさ、あの、兄ちゃんのツレの目付き悪いスクラッパーって……えっと……女の人？」

「はあ？」

予想外な質問にクライムは思わず裏声で答えていた。

一拍置いて、その問いについて少々不埒な疑問が湧く。思考と口が直結している彼だから、もちろんそれは即座に口に出た。

「覗きでもすんのか？」

「なッ……バカちげえよ！ 女ってタオルいっぱい使うじゃんか！ いるかどうか分かんないし、い、いるにしても女の風呂場に堂々と入れるわけないだろ！？ だからだよバカ！ それがなんで覗きする事なんだよ！？」

「……お前が変な事言うからだろうが」

「言ってねえよバカ変な事なんか！ 自分がエロい事考えたの人のせいにすんなッ、バカ！」

よっぽどクライムの言葉が勘に障ったらしく、キールは勢いよく捲し立てる。バカと四回も言われたスクラッパーは、これ以上子供の癪癪に付き合うのは面倒だったから、ある程度口を慎む事にした。「俺だって上官の風呂なんか頼まれたって見たくないデスケドネー……絶対、斬られて死ぬし」

「何ブツクサ言ってるんだよ！？」

「あー、多分タオルいらないうぜ。あの人たぶん頭洗わないから」
あっそう！ という甲高い声と共に、戸がもう一度悲鳴を上げる。その衝撃で蝶番が緩んだのか、更に隙間風が強くなった。折角洗ったばかりのクライムの顔面に、ぱらぱらと砂が張り付いていく。

「……おい、トンだサービス満点だな……」

乾いた笑いは風にかき消され誰の耳にも届かなかった。

スクラップの仕事をするにはまだ少し、準備が必要だ。

乾期真つ只中の保護区域、通称“廃墟の森”に行くつもりなら、マスクやら水やら食料やら、スコップやら武器やら弾薬やら——ともかくそんな物が必要になる。

それら全てをまとめて運ぶなら、ジープは必要不可欠だ。

しかしそのジープは今、在って無いような国道の片隅で往生しているのだ。

コロニーの頼まれ屋の男にガソリンを渡しおいてきぼりのジープの移動を頼んで、砂まみれで到着した上司と部下は取り敢えず、有料のシャワールームを借りてその砂を落とす事にした。

しかしこのシャワールーム、タイルはひび割れ、風は入り放題で、水に勢いがなく、おまけにとてつもなく狭い。

酷いものだがこのコロニーではこれでもまともな方に入ららしい。
スクラップ破壊措置執行官の権限と言うものにかこつけてそこそこの値の張る

“良い方の”風呂を借りたいと申し出たは良いものの、この小さなコロニーには簡易的なシャワールーム以外に風呂はなかった。ぼったくりもイイとこだとクライムは思ったのだが、上官が何も言わずにシャワーを使いに行ってしまったため、今更そんな文句も言いづらくなってしまった。

だがまァ——ここじゃ豪勢に水に浸かるなんて真似は出来っこなさそうだ。

風呂場はともかくとして、水汲み用の風車付きの大きな井戸も貧民街の奥にポツンとひとつ見えるだけだった。

どうもこの住人達は最低限の水しか引く気がないらしい。最も、ここも政府管轄のコロニーの一部に違いはないから、その為に大きな水源地を作れないのかも知れなかった。

住人達は、なるべく目立つ事は避けたいのだ。

スクラッパーの雇い主である政府は今、バラバラになってしまった権力と人民を支配しようと黒い腕を伸ばしている。

大戦後、世界政府と貧民街——つまり自治区の住人達の折り合いは悪くなる一方で、何とか小さなイザコザで済んでいるのが現状だった。

何をするにも“許可を待て”“援助を待て”とうるさい政府も、しかしそれ程の力があるわけではない。けれど牽制のやり方はインテリらしく実に陰湿で、何かと住人達の怒りを買うのだ。

以前、どこぞの巨大な水源地を掘り起こし、それを中心として貧民街を更に住み良くしようと奮起した所があったらしい。

だが、そこに政府が目をつけた。保護区に近いから街を広げたり人が増えたりすれば危険が増すだのなんだのと因縁をつけて、その水源地を封鎖したのだ。

今そこは、雇いのスクラッパー達ではない、直属の政府軍率いる軍事基地の拠点になっているらしい。水源地どころかコロニーもほぼ乗っ取られる形で軍隊に奪われてしまった。

——無茶苦茶な話だ。

クライムはだから政府が嫌いだった。

彼が今いるこのコロニーは四十一保護区域に近い。その上、乾期が長いのだ。

住みにくく渴れた厳しい土地。だから政府はここには来ない。軍隊も寄越さない。

使い捨ての、はっきり言って出来不出来もどうでもいい、雇いのスクラッパー破壊措置執行官を寄越すだけに留まっている。

保護区域と呼ばれるそこには、大戦の“残りカス”が必ずあり、それを駆逐しなければコロニーは確実に安全な住処とは言えない。なのに、である。

ここに寄越されたのは、クライムとシン、ただ二人の使い捨ての

犬のみなのだ。

——政府の高官共は結局のところ、何がしたいんだ？

またふと、クライムの頭にその言葉が浮かんた。

この世界は一体、何処へ行くのだろうか。どうなるのだろうか、俺達
は。

結局のところどう立ち回っても、行き着く先は一点しかないの
ではないだろうか。

募る苛立ち。

再びの闘争。

来たる終末。

それしか、ないのではないか——。

「……あー、ダメだダメだ、ヤメヤメっ！」

かぶりを振ってクライムは呟いた。

考えれば考える程、不条理さに落ち込むだけだ。

何にも考えずにやりゃあいい。それでこそそのスクラッパーだろ
うが——。

「クライム」

ふと静かな声が彼の鼓膜を叩く。それは耳慣れた、黒髪の女の
声だった。

「……あ、シン上官？ なんすか？」

「遅い」

ストレートな一言は少なからず苛立ちを孕んでいる。

クライムは知らなかったが、この上司は女性のわりに早風呂の
タチらしい。

「スンマセン……」

「先に行くぞ。荷を頼んだ店だ」

「あー、はい。了解っす」

「待つのは面倒だ。急げ」

命令は簡潔かつ、相手の状況など完全に無視したものだった。

だがこの微妙に苛立った状態の彼女は、命令をないがしろにされ
るとまた極端に不機嫌になる。経験上クライムはそれを熟知してい
た。

いつだったかのようにまた、刀を鼻先に突き付けられては堪らな
い。

クライムは慌てて帯刀用のベルトを締めると、ブルゾンに袖を通
しつつ脱衣場を飛び出した。

宣言通り、シンはだいぶ先を歩んでいる。無愛想なこの上司は、
本気で部下を待つ気がないらしい。いつもの事だからクライムは小
走りでその後を追った。

砂混じりの乾いた風が彼女の束ねた長い黒髪を揺らしている。

後ろ姿は存外に小さく細いが、ピンと伸ばした背筋と女にしては
すこし広い肩のせいで少年のようにも見えた。

だからか、とクライムは思う。

シンはいつも無愛想だ。その上鋭い顔付きだから、スクラッパ
ーの制服を着ていれば男に間違われる事もあるだろう。

そもそもこの職業に就いている女は稀だ。

「シーンじょーかぁーん、アンタちよっとくらい待ってくれたって
良くねえっすか？」

「先に行くと言っただろう……あと、その気味の悪い呼び方をやめ
ろ」

「冗談じゃないすか」

「冗談なら尚更やめろ」

やっと並んだと思ったら鋭い視線を向けられて、クライムは固ま
った。

「……上官、刀はやめましょう、頼みますから」

「今は帯刀していない。見てから言え」

固まったままの部下にはもう目もくれず、冷たい上司は歩いて行
く。

今日は誰彼構わず散々けなされる日なのだと、クライムは少し

悲しい諦めを飲み込んだ。

ひゅうう、と高い場所で風が哭く。

高い塔のような建物の、抜け落ちた窓が鳴っているのだ。大戦前の建築物だろうか。

それはかなり日に焼けて、塗装の剥がれた外壁は白くひび割れていた。

先程まで建物の上にバタバタと揺れていた洗濯物は取り込まれたらしく、ひとつもロープに掛かっていない。

空は青く、高く澄んでいる。

静かなコロニーだった。

通りの日陰で男が数人、煙草を吸っている。木戸の向こうには料理をする太った女、道の奥には裸足で走り回る子供達。けれど見える人影はそれくらいだ。

「そーいや上官」

「なんだ」

「報告書にあったヤツですけど、ココの近くだったんすよね。『自動式重機甲兵器による保護区外での査察官、事務工員への攻撃』」

「……ああ」

いつも不機嫌そうな彼女には珍しく、なにか苦いものを噛んだような答え方だった。

ブルゾンの背中にパラパラと砂の弾ける音がする。コロニーの中だからある程度建物に遮られているものの、やはり小さな砂粒全てを防ぐ事など不可能なのだ。

……ふおおおおおん、

おおおおおおおん——。

遠くで“壁”が哭く。

灰色をした地獄の壁が哭いている。

「んで、アレの後にイルクルツソは首都に戻ったんですっけ」

「そうだ」

「『銃器による応戦。破壊措置執行官、三名死亡。他、重軽傷を負った事務工員一名と査察官一名は近隣コロニーへ撤退』——とか書いてましたよね、確か……怪我する前にさっさと逃げりゃ良かったのに。ただの雇われ事務員なのにキツイ現場に当たっちゃまって」

クライムは返事を期待していなかった。シンの答えはいつも素っ気ない。

だが珍しく、その問いには答えがあった。

「姪がいたんだ」

「はい？」

「彼の姪が、一緒にいた。保護区の定期視察後には二人で首都に帰るつもりだったらしい。だから、イルクルッソも交戦に参加した」

「ふーん……」

二百六番、十五頁のB項目。

事件の顛末だけが箇条書きされたその報告書に、その事実が記載される事はない。

これから先も間違いなく、ない。

「それで」

「なんだ」

「その、姪って。どうなったんすか？」

長い黒髪が揺れて、無愛想な横顔が振り向く。シンの眉はいつも通り、不機嫌そうな弧を描いている。

「死んだそうだ」

「……そうすか」

いつの間にかバイヤーの店が見えていた。その前で荷物を積み上げていた男が、店の前で手を振っている。

ジープはまだだが、荷物は全てすぐにでも積み込めるように店の前に積んであった。

「……酷エ話すね」

彼女はクライムの言葉に、今度は答えなかった。
そうだなとも、それがこの時代だとも。
何も言わなかった。

act・4『グラブルパーティー』

「エンジンまで見てくれてあんがとな、オッサン！」

「ああ、気にすんなサービスだ。『壁』の近くは最近ヤバいみたいだからな……氣イ付けていけよ、スクラッパ―」

「おう」

笑顔を浮かべたクライムは、助手席から身を乗り出して片手を上げた。

少し離れた店の前、フロントガラス越しに店主も笑って手を上げる。

黒く日に焼けた顔は騒がしい彼の息子とそっくりだ。その息子――キールはクライムに腹を立てたままなのか、結局見送るこの場には現れなかった。

「では、生きていれば明日また」

「お、おい……」

「上官、コエーっすよその冗談」

縁起でもない女のセリフに、男二人はさすがに微妙な表情になる。実際死人が出る職業だから冗談にもならないのだ。

しかし彼女は冗談を言ったつもりなど毛程もなかったのだろう。少しばかり柳眉を歪めて、黒髪の上官はため息を嘯み潰した。

「……出発しよう」

何時もの仏頂面で、シンはキーを回した。軽い回転音のあと、腹の底に響くようなエンジン音が青い空を貫いた。

メンテナンスの賜物だろうか。乗って来た時よりもその音は滑らかだ。

「またなー！」

子供のようにコロニーへ手を振るクライムは、傍目に見ればバカな観光客も良いところだ。それを視界にも入れず、怒りっぽい女軍人は一気にアクセルを踏み込んだ。

土埃だけをそこに残し、車は勢い良くコロニーの道を駆け抜けていった。

砕けたレンガ塀、日焼けた白い壁、煤けた木戸。風景は次々に流れ去る。

規則的に並ぶ家とも廃墟とも呼べない建造物はそう数もなく、すぐに全て背後の風景になった。

舗装のないむき出しの道を飛ばしていくと、すぐにコロニーの端に辿り着く。

この先に広がるものはもう、ただの荒れ果てた大地のみ。進むのは道なき道だ。

それでも行き先は見えているから迷う事もないだろう。砂に曇ったフロントガラスの向こうには、国道で見た物より更に近付いた灰色の壁がある。

壁の向こう側にあるのは“第四十一保護区域”、今回の任務地だ。建物から離れた途端、ジープに横殴りの風がぶつかった。

取れ掛けたサイドミラーが今にも飛んでいきそうだ。けれど運転手でもあるシンは最初からサイドミラーなど見てもいない。飛んでいったところで問題はないだろう。詰め所に戻った時に何か言われはするだろうが。

国道よりも転がる石の数の増えた固い大地に行くジープは、走りながらバラバラになってしまうのではと不安になる程激しく揺れている。

乗っている彼らはもちろんモロにその震動の餌食となっていたが、相変わらず運転手がそれを気にする事はないらしい。

「うおっ……上官ヤバイ酔いそうっす、コレ。やっぱ少しスピード

——」

「急ぐんだ、ガタガタ言うな」

ピシヤリと言ったのけると、冷たい女はおもむろにギアに手を掛けた。

落とすわけがない。もちろん上げたのだ。

ガタガタ言っているのはむしろ車の方なのだが、そんな事に興味はないらしく、シンはいつもの如く更にアクセルを踏み込んでゆく。彼女の性格からして嫌がらせのつもりはないのだろう。

だが『酔いそう』と訴える同乗者がいるのにそれはないだろう、とクライムは喚きたくなる気持ちでグツと飲んだ。もしかしたらバースしかけた昼飯も一緒に飲んだのかも知れない。

ゴウゴウと車窓の外に響く風音とは対照的に、砂ぼこりと汗の臭いがする車内は涼しさなど欠片もない。

いくらフロント硝子にUVカット加工を施そうが、それで日射しが和らぐ訳ではないのだ。

必死に口をつぐんだクライムはなるべく遠くを見るようにした。乗り物酔いの最善対応策だ。

と言うより、その方法以外に何があるのか彼は知らない。

「あーあ……九十とか、八十番台の保護区なら近かったのに。上のヤツらも気が利かねーつつうかなんつーか……ねえ上官？」

堪らず溢したクライムの愚痴に、やはりシンは答えない。

窓の外からは小さな嵐のような音が絶え間なく続いていた。砂嵐とまでは行かないが視界は薄赤色に曇っている。

これだけ開けた場所ならそうそう危険な穴や岩を見落とす事もないだろうが、何しろ速度が速度だ。シンがどれだけ危険物に注意を払っているか定かではない。

ジープのタイヤが耐えられないような物でも轢いたらどうなるんだ——とクライムは想像して冷や汗をかいた。

運悪く、というべきか。

その瞬間に、どうやらジープは“それ”にぶち当たったらしい。

国道での乱暴運転が可愛く思える程、車体が跳んだ。

気を抜いていたら彼は座席からすっば抜けていただろう。

唐突な一瞬の浮遊感。バーティゴ。

だがしかし、一瞬はあくまで一瞬だ。

歯を食いしばる時間しかなかった。とてつもない音と共に二人の身体は座席に叩き付けられた。

「……グヘッ！」

余りの衝撃に、潰れたカエルのような悲鳴を誰かが上げた。言ってもカエルと言う絶滅種の声を彼らは知らなかったから、ただ恥ずかしい叫び声を聞いたただけだ。

問題は、その悲鳴がクライムのもでも、シンのものでもなかったと言う事だった。

悪態を吐きかけていた気の合わない上司と部下は、珍しくそろってポカンと口を開けた。

「あ？ ……今のって——」

「停めるぞ」

トップギアだと言うのにシンはいきなりブレーキを踏みつけた。

耳障りな音と、雪道もかくやの横滑り。

エンストの派手な音と砂埃を上げたジープがどうにか止まったのは、軽く十メートルは滑った後だった。

危うくフロントガラスを突き破りかけたクライムが血の気の引いた顔で叫んだのも当然である。彼はシートベルトをしていなかった。

「じょ……じょ、上官！ あ、あっ、 안타な、今のはマジで——ッ！！」

走馬灯まで見てしまった可哀想な同乗者は切れ切れに叫んだが、運転手は聞こえてもいないかのようにドアを開けたただけだった。

砂埃が狭苦しいジープの中にブワリと吹き込む。

慌て袖で顔を覆ったクライムに対し、いつ着けたのか、ゴーグルを装着したシンは全く普通に車を降りた。

「ちよっ、上官！？ あっクソ目痛ェ！」

「迂濶だった。私とした事が……」

「はい？」

小さく唸ってシンはドアを手荒に閉めた。

靴を下ろした大地が、ザクザクと砂の崩れるような音を立てる。

日はまだ高く、足元に落ちる影は黒々としていた。

ウンザリしたような彼女の眉間の皺にも濃い影が貼り付いている。ジープの後ろ側に回り込み、シンは少し歪んでいるトランクに手をかけた。

が、引き上げたそれはどうしてか開かない。

ギロリと、鋭い眼光が助手席に収まったままの部下を射抜いた。

「……クライム」

「メンテナンスん時は開きましたよ、フツーに！ 荷物積んだ時も！」

思わぬとぼっちりにクライムは慌てて叫ぶ。

あまり信用が得られた様子はなかったが、結局シンはトランクに向き直った。

目に見えて深くなった眉間の皺と比例するように、手の甲に筋と血管が浮かび上がる。

シンが腕を振り上げると、今度こそ、殆んど割れ飛ぶような音を立ててトランクは開いた。

中を目にした無愛想な彼女の顔は何の変化もなかったが、反ってそれが恐ろしさを増長させている。

UVカットのグレーのレンズ越しに、シンの黒い眼は“彼”の姿を捉えた。

「……不法搭乗して何をする気だ」

決して大きな声ではなかったが、それは酷く重々しかった。

トランクの中で虎に追い詰められたウサギのようにガタガタと震えていた人物。

それはクライムに罵詈雑言を散々吐いて去った筈の売人の息子――キールだった。

act・5【グラップルパーティー2】

不法搭乗者——もといキール少年は、それこそ泣く寸前といった顔だった。

小柄でやせっぽちな身体も憐れな程にガタガタと震えている。

対峙する破壊措置執行官は一向に目を反らす気配もないし、剣呑な感情はだだ漏れも良い所なのだ。その上、背には刀が一振り。分かりやすい“殺しの道具”と“それを使える人間”が自分を見下ろしている。

泣けと言わんばかりのシチュエーションに、ただの売人の子供であるキールが泣きかけるのも当然だった。

しかし、シン本人に泣かせるつもりは毛頭ない。

何しろ彼女は仏頂面が常なのだ。だが日射しの強さに顔をしかめただけで、その顔がどれだけ凶悪な物になるのか——残念ながら知らないのは本人ばかりなり、である。

そういった訳だから一触即発の雰囲気になるのはどうしようもなかった。

どちらも動けない、と言うより動きようがない。

キールは動いたら殺されるかも知れないと卒倒寸前だったし、シンはシンでまさかこれくらいで泣かれたら困ると考えて硬直していた。

馬鹿馬鹿しいくらい、噛み合わせの悪い対峙だったのだ。

「なんなんすか、上官？」

ただならぬシンの雰囲気、やっとクライムも助手席から降りた。のたのたとマスクを装着しレンズに付いた砂ぼこりを親指で拭いていた彼も“トランクの中身”を目にした途端、絶句した。

「……………んなトコで何やってんの、お前」

やっと呟いたため息混じりの言葉はかなりの呆れも含んでいる。

キールはトランクの内側に足を突っ張ったまま、やはりガタガタと震えていた。けれどクライムの軽口は思いがけずこの気まずい空気の緩和材になったらしい。震えながらも少年はぼかんとしたアホ面を晒すクライムを睨み付けた。

「う、うるせえ！ オレが、か、隠れてたのにも、気付かなかった奴らが――」

「ガタガタぬかすなってか、え？ ガキがほざいてんじゃねーぞコラ！」

「そっ、そのガキに出し抜かれてんじゃねーよ、バカッ！」

「おまつ、コノヤロ、なんだよ今日はみんなして人の事バカバカ言いやがって……！」

安い挑発だったが、なにせ相手は問題児である。

あっさり乗ってしまったクライムを横目で睨み付けシンは鋭く舌打ちをした。

「話の邪魔だ、黙れ」

「……うイーす」

「お前も、今すぐ降りろ」

「……」

「話を聞いただけだ。降りろ」

「……はい」

相変わらず不機嫌そうではあったが、シンの声には安堵も混じっていた。辛うじて気付けるかどうか、といったものではあったが。

キールもまだ怯えてはいるが、泣きそうな様子ではなくなっていた。

脂汗と砂ぼこりでドロドロになった顔をゴシゴシと袖で擦りながら、彼は狭苦しいトランクから降りた。

動作は素早かったが車酔いでもしているのか、少しばかり上体がぐらついている。

咄嗟にシンが二の腕を掴んで支えてやったのだが、先程までの態度が態度だ。腕を取られた途端、キールは石像よろしく固まった。

「……う」

「シン上官、ガキ泣かしちゃ駄目っすよ」

「泣かせてはないだろう……車酔いか」

「へ、いき、です」

「グラグラじゃねーか。つかテメエなんで上官には敬語なんだよ」
ブツブツとクライムは文句をたれたが、本来はそれが当たり前なのだ。

しかし尊敬語も謙讓語も違いすら分からない彼には、他所の次元の話題にも近かった。

キールは平気だと言ったものの、傍目にもこの少年が立っているようにないのは明らかだ。

それに折角の日陰と椅子があるのに炎天下で立ち話をするのも馬鹿な話だろう。

スクラッパー二人はジープのあって無いような後部座席に少年を押し込み、自分達も元いた席に収まった。

キールが収まっていたスペースは本当に僅かな隙間だったようだ。彼が後部座席で小さく“中、広いんだ”と呟いたのをシンは聞き逃さなかった。

「おい、車ん中で吐くなよ」

「平気って言っただろ——」

「嘘吐けさつきからそれしか言っていないだろ。お前」

「……へいき、だもん」

「あーはいはい！ 吐くなら外出ろよ」

ムスツとした顔でクライムの後頭部を睨み付けていたキールも、バックミラー越しにシンに見られていた事に気付いてサツと青ざめた。慌て頭を下げ、モジモジとゴーグルをいじり始める。

どうやらキールはこの小柄で目付きの悪い女スクラッパーにこつてり絞られると思っているようだ。

——話を聞きにくい、全く。

小さくため息を吐いて、シンはミラー越しではなく横目で“不法搭乗者”を捉えた。

「それで。理由はなんだ」

「……」

「言え」

「上官脅してどうすんですか」

「脅してない。聞いているだけだ」

苛立ちを紛らすようにまたため息を吐いて、シンは質問の仕方を変えた。

「何処に、行きたかったんだ」

「……え」

「当たりか」

ハッとキールは息を飲む。

「ち、違う！」

「凶星だろ、その反応じゃーな。俺にだって分かるぜ」

クライムの挑発に今度は返す事ができなかったらしい。

一瞬奥歯を噛み締めて、けれど少年はグツタリと肩の力を抜いた。観念した印だった。

「……保護区域」

「だろうなあ」

「でも！ アンタ達に迷惑掛けずに済ますつもりだったんだ！」

「今でじゅーぶん迷惑してるぜ？ 予定時間から既にオーバーしまくりだ」

それはジープをガス欠させた自分達のせいなんじゃねえのかよ、とそんな考えがチラリと過ぎったが、まさかこの状況で口に出来る訳がない。

握り締めた手を見つめて、キールは暫く黙っていた。

まだ小さい子供の手を覆うのはボロボロの革のグローブ。破れた穴から覗く指先は、グローブと同じくらい傷だらけのボロボロで、日焼けて赤茶色になっている。

働きづめの人間の手だ。楽なんてした事もない、それを物語るに足りる手だった。

——そんな手の持ち主が、一体何故、あんな場所に行こうとする？ 戦乱の名残が息づく、いや、未だに戦争の終わらないあの場所に。

しばらくして、シンは口を開いた。

「お前」

下を向いたままのキールの肩がビクリと揺れる。

「何をしに行く気だ」

「……い、言わない」

「言わないなら此処に置いていく」

「ちょ、上官！？ 『コロニーの住民の死亡率を高める行為』は規定違反ですよ。ヤバいですって、降格どころか危険地帯送りになる！」

「シラを切り通せば誰にも分からん」

「……マジすか？ え、本気？」

物騒なセリフは相変わらずの不機嫌な口調で、冗談かどうかクラムですら判断しかねている。

無論キールにその真偽など到底分かる筈もない。と言うより、この状況的に彼女は至って本気に見えた。

乾季の乾ききった空気が急速に少年の汗を乾かしていく。最早冷や汗も出なかった。

——コロニーと保護区の間のもない場所に放り出されたら？

あるのは何処までも広がる赤い砂漠だけ。水も木陰もない。日除けも気ろ過マスクもない。陽炎のように揺らめく街も、灰色の壁も、どちらも遠い。

そもそも、炎天下の熱砂の上で数時間過ごす人間がどうなる？ この土地で育った彼にとって、それは容易に想像できる死への宣告だった。

砂漠への置き去りは昔、人減らしの悪法のひとつだったと、そう

父親から聞いている。

生者からは命をもち取り、そして死者からも貪欲に全てを奪うのだ。砂漠という場所は。

遺骸が腐る暇もない。水気は全て乾ききり、残った皮や骨もその内風が崩してしまふ。荒い砂に磨られていく内に、それらも砂粒となっていくのだ。

広大な、此処は墓標。砂漠の砂は死でできている。

ゴクリと、キールは生唾を飲んだ。

カラカラの喉は少しも潤わなかった。

「……言い、ます」

「賢明な判断だ」

「び、ビビった……ガキ相手にやり過ぎッスよ上官」

「結果的に死亡者は出てないだろう」

「なんで基準が生死なんすかアンタは!？」

シンの様子は至って真面目だった。

つーかこの女マジだったのか、と男二人は揃って青ざめたのだが、当の彼女は何処吹く風だ。

「おいガキ、早く喋った方がいいぞ。俺この人がマジでやるんなら止めに入るとか無理だから」

冗談半分で、耳打ちするようにクライムは呟いた。

本当におっぼり出される前にと、キールは大慌てで頷いた。

「あつ、あのそれなら、事件……こないだこの辺であつた自動式重機甲兵器の事件、知って……ますか？」

「ああ」

「アレで……死んだって言う、女の子の事も？」

「ああ」

報告書の端に詩を書いた事務工員——都に帰るその日に、オード・オートに姪を殺されたイルクルッソ。

それを思い出し、クライムは思わず相づちを打っていた。

——世間は狭いよなあ。

少年もまた、その話の関係者だったとは。

「その子、あの時死んだって言われてるけど……本当は違って」

「……どういう事だ？」

「オード・オートに殺されたんじゃないくて、監査官が逃げる時、保護区の側で置いてきぼりにしたって——」

「誰がそれを」

遮るようにシンが言った。見れば彼女は身体ごとキールの方に向けている。

少し乗り出し気味の姿勢にキールは一瞬たじろいだ。だが、真剣な彼女の目に促されれば喋らないわけにもいかない。

乾いて割れた唇を少し舐め、キールはおずおずと答えた。

「監視塔の、事務のおじさん。エリトリアの……おじさんが、そう言ってる」

キールの言葉を聞いて、シンは彼から目を反らした。

運転席に座り直す彼女を見ても、その何とも言い難い様子に全く気分が落ち着かない。

自分は何か、まずい話をしたのだろうか——。

そうは思っても今さら撤回できるものでもない。

指先のささくれをつまみながら、ぼつりぼつりとキールは続けた。

「だから、オレ、エリトリア見付けたくて……もう骨だけかも知れないけど、その骨もなきや、おじさんも可哀想だし……オレも、嫌だから」

「……」

「スクラッパーが来て保護区の片付けしてる間なら、オード・オートもそっちに行くし、それにオード・オートがいなくなったら、オレ一人でもエリトリアを探せると……思ったんです。帰りも、トラックに隠れてたらバレないって……」

ごめんなさい。

少年はそう締めくくった。自分の手に視線を落としたまま、気不

味さから顔を上げる事は出来ないようだった。

シンは暫くの間何も言わず、前を向いていた。

フロントガラスを叩く砂の音は相変わらずバラバラとうるさい。沈黙と比例するように風もまた強くなる。しかし風向きが変わったのか、ジープの中に砂ぼこりは入らなくなっていた。

乾季の風が赤い砂を巻き上げ、一瞬赤い霧のようになる。あれを吸い込んだらまず間違いない喉をやられるだろう。

コロニーを離れれば離れる程、人が住める環境ではなくなっていく。

そう言う土地だ。

今となっては、何処もそうだ。

シンはまたひとつ、ため息を吐いた。

「暗くなると仕事が難しい——出発するぞ」

「え」

「はあ？」

いつの間にか日が傾いて来たのだろう、車の左側から日が射し込むようになっていた。僅かに赤みをました光だ。

「シン上官、連れてくんですかコイツ」

「ああ」

「なんでまた」

「証人だ」

「はあ？」

意味が分からないと顔に書いたようなクライムとキールをちらと横目で見て、シンはキーを回す。

荒っぽい運転を乗り越えたジープのエンジンは、少し休んだためか軽快に回り出した。

「先の報告書の訂正申請のためだ……ベルトを絞めろ」

「え、ちよっ、ま——っ！——！」

「ウギヤアアアア！——！」

停止同様、出発も唐突極まりなかった。

ジープは早速岩盤の段差に飛び上がり、車中は絶叫のこだまする地獄と化する。

騒がしい一行は再び第四十一保護区域に向かって走り出した。

目指す先は灰色の高い壁。

赤茶けた砂地と青空とのコントラストの中で、その姿は異彩を放っている。

不気味な程に変化がない灰色。

砂が死でできているのならこの壁は何でできているのだろう。

間違はなく、死より良くない物の筈だ。

そう確信できる不穏な色を湛え、壁は静かに三人を待っていた。

act・5. 5【ワンスアポンアタイム】

灰色の壁がそびえ立つ。見上げるその向こう側には、うつすらと砂ぼこりにけぶる高い建造物の影が見える。

そこは通称、廃墟の森——保護区域。

そう呼ばれる土地が大陸の各地に点在している。大戦が終結した今でもまだ。

遙か昔は史跡や森林の保護を目的とした土地にその名を与えたらしいが、現在それは単なる蔑称に過ぎない。

保護区域——正確には『非戦闘市民隔離保護区域』。

しかしそれも戦時中の呼び名だ。

そこにはもう人など住める筈もない。だと言うのに、この呼び名は戦乱の象徴であり続けようとするかのように、いつまでも人々の記憶と心と生活から消え去ろうとはしないのだ。

各地に置ける大小の戦争が慢性化する中、各国は首都の疎開地区ヴォーダーウオールの一部を断道国境壁よりも巨大な壁で封鎖し“その名”を付けた。

入れるのは老人、子供、妊婦、怪我人……一般論として、手を出せば非道と呼ばれる事を覚悟しなければならぬ弱者。

つまりこれは牽制だ。

『ここは軍の、ましてや戦の脅威の及ぶべき場所ではない。この壁の内を狙うなら、誠に遺憾ではあるが、非人道的な敵国そちらの壁の内も我々の攻撃対象として捉えさせて頂く』——という。

首都付近、特に危険地帯から少し距離を置いた街を外郭としてそれは作られ、増えていった。各国に必ず一区はあったようだ。

高い灰色の壁は戦争の不穏を映すようだったが、ともかく市民はその中にいればそれなりに安心だったのだ。

長い時間をかけ地方に疎開するより道程も安定していたし、事実

戦争の混迷化を防ぐため、各国とも保護区域への空爆攻撃や進撃はほぼ無かったのである。

国としてもそれはありがたかった筈だ。

保護区域が首都の近辺であれば、最悪、国の中枢である首都が攻撃された場合でも非難や籠城は容易い。何しろそこは“弱者の園”なのだ。いざ軍隊が基盤をそこに移したとして、異論や反対を押し通せる人間はまずいない。何しろ、そんな弱者ばかりを集めて押し込めてあるのだから。

前線に決して赴く事のない司令官達の、それは言い換えれば“盾”だった。

——戦争が結局、ただ巨大な殺戮の応酬に過ぎなかったのだと人々が気付いたのがその保護区域の中だったとは、酷い皮肉である。

最初に壁の内が“死の都”となったのは、サグレダマリタ共和国・第十三保護区域。仕掛けたのは国境での争いが激化していた敵対国、マールズ連邦だった。

国境などという区別すら過去になったこの世界で、その名はただの記録に過ぎない。

だが当時サグレダマリタは同盟国七つを従える大国で、それは争い合う国々に多大なる衝撃と恐怖を与えた。

小さな軍事国の造り出した狂気の名は自動式重機甲兵器。オード・オート

その兵器の実験的使用は、実験と言うには過ぎる程の大成功を納めたと言える。

そうして。

壁の外へ逃げる事の叶わなかった一般市民の大量虐殺という目を覆いたくなる結末は、世界を巻き込み滅ぼす事となる凄惨を極めた壊滅戦争——“十三年戦争”の幕開けの合図となったのだ。

act・6【灰色の壁】

後ろに流れて行く単調な壁の灰色に、ほんの僅かな変化が現れたのは間もなくの事だった。

ところどころ、細く黒い模様がある。

模様だと思ったのはそれが余りにも不規則に、だが何かを示すように長く続いているからかも知れない。ジープの振動に揺さぶられてぼうつとしてきた頭でキールは考えた。

昔話の絵本に出てくる遠い星の悪魔は、そういえばあんな姿で描かれていた。とぐろを巻く、黒い魔物。

茫洋とした思考が脳裏を掠めては消えてゆく。

「上官、弾痕だ。そろそろ近いんじゃないか？」

「そうだな」

「……弾痕？」

助手席の後ろにしがみ付きながら聞き返すと、クライムがちらりと振り返った。

「見えてんだろ、黒いの」

黒いの――あの模様が？

それはどう見ても爆撃の痕ではなく別の何かに見えた。

キールは一瞬からかわれたのかと訝しんだが、また正面に向き直ったクライムの目は間違いなくその“黒い痕”を追っている。それは決して冗談の類ではないだろう。出会って間もない男ではあるが、こんなに真剣な目をして冗談を言うタチだとは思えない。

ガタガタ揺れるジープの座席にしがみ付きながら、少年はまたそれに視線を戻した。

円い印の様な物からグニャグニャと伸び崩れた文字の様なもので、その形状は実に様々だ。奇妙なのはそれがほぼ全て地面から一定の高さで続いているという事だった。

「ああいうのも弾痕なのか？」

「……あ、ビンゴっ！ 先、三十八メートルに『出口』」

クライムはキールの言葉には答えず、急に前方の壁を指差した。それと同時にブレーキの甲高い悲鳴が静かな荒野に響き渡る。またしても過激な急停車だった。

もうもうと派手な砂埃を巻き上げ本日二回目の緊急停車を行ったジープの内部は、事故寸前の様相だ。

運転中と停止後で座席にいた人物の配置が変わる事などそうそうない。

二人の同乗者が容赦なく叩き付けられた前方座席とフロントガラスが何事もなかったのは不幸中の幸いだった。

ただし、配置が変わるくらいの目にあった助手席の同乗者の体が無事かどうかはまた別である。シートベルトの喰い込んだ腹を擦りながら、クライムはぎこちない動きでそれを外した。

「大丈夫か」

「……じよ、上官……急ブレーキ止めろって、俺はっ、毎回毎回……ああクソッ、内臓吐きそうだ……オエ」

どうやらあまり大丈夫ではなかったらしい。助手席の部下は涙目だった。

対する運転手は真顔だったが、その瞳には僅かばかり不服そうな色が浮かんでいる。

もしかして、今の急停車もこの人からすれば、少しは『丁寧』に停めたつもりだったのか――？

だとしたら。

クライムはこっそり胸に誓った。

面倒臭い事この上ないが、今度、運転の上手い同僚に運転を教わらなければ。この上官にこれ以上危険運転をさせておくと、経歴書の締めくくりが交通事故死という事もありうる。

それは勘弁だと、なかば本気で彼は思った。

当の運転手は相変わらず何も無かったかのようにテキパキと動い

ている。シンが無造作にエンジンを切ると、聞こえるものは砂交じりの風の音だけになった。

時々、思い出したように壁が鳴いている以外は静かなものだ。

——おおおおおおおん、

ふおおおおおおおおん……。

運転席からちらりと後ろに目をやって、シンは唐突に顔をしかめた。

「んあ？ ……ああ」

つられて振り返ったクライムはすぐその表情の訳に気付いて苦笑した。

キールは助手席の後ろに突っ込んだまま、気絶していたのだ。通りで文句も悲鳴も聞こえない筈だと彼が思ったところで、小さな背中がびくりと震えた。

「っうわ、あ！ ……あ、れ？」

「よう、起きたか」

息も荒く飛び起きたキールに、クライムは意地悪く笑ってみせる。

「オレ……オレ車が、てつきり、壊れたんだって……え？」

息を切らしたように途切れ途切れにキールは呟いて、きよろきよろと辺りを見回している。シンの行った急停車は車に乗った事など殆んどない貧民街の少年にとって、今しがたの出来事は大事故と大差なかったらしい。そもそもそれが常識だろう。

黙りこくってしまった上司の代わりに、クライムが苦笑いで答えた。

「壊れてねーよ停まっただけだ。ほれ、起きたんならさっさと降りる準備だ。置いてくぜ」

「置いてくって……どこかいくの」

「あ？ テメエここに来たくてわざわざ乗り込んだんだろ。なあに馬鹿ぬかしてんだ」

状況の掴めないキールを尻目にスクラッパーふたりはテキパキと

装備を整え始めてている。

スクラッパ―——そうだ。このふたりは破壊措置執行官だった。
向かっている場所なんて、ひとつしかない。

気ろ過マスクを足元に置いたバックパックから取り出したクライムは、袖でそのレンズを何度か擦り、だがその内諦めたようにかぶりを振った。レンズは白く曇ってしまったている。

「くっそダメだな、これじゃ前見えねえ……おい、ガキ」

「えッ!？」

「何ビビッてんだ？ お前以外にいるか。おい、お前の横になんか、箱あんだろ。中に換えのレンズが入ってたよ。取って渡せ」

「命令形かよ……」

「お前いなかったら自分で取ってるよ。ほれ二枚だ、よこせ」

「……四枚だ」

割り込んだのは低く響くような女軍人の声だった。

思わずキールはびくりと肩を振るわせたのだが、マスクに視線を落としたままのシンがそれを目にする事はなかった。気付いていたかも知れないが、それを確かめる術など少年にはない。

シンは振り返りもせず左手を後ろに差し出している。ここに乗せろ、と言う事なのだろう。

「……はい」

「何で上官に先に渡すんだテメエ」

「別にいいじゃんか！ それに『れでいふぁーすと』って言うだろ」
「なんだそれ」

いつも父親が口にする古語の意味なんてキールにも分からなかった。

さすがにこの女軍人が怖いからだとは言えなかったのだ。

本人が聞いているからという理由は半分で、あとは彼なりの男のプライドという物に関わるからだだった。それに今、それを言うとは嗤うであろう男がひとりいる。

「そーい、お前マスク持ってねえよな」

「バンダナあるから。それでも巻いとくし」

「ならまあ、大丈夫か。もともと俺ら予備持ち歩かねえからよ……保護区で助けられるような人間に会うことなんて、滅多にねえから」マスクのレンズをはめ換える、ぱきんッ、という音がやけに鋭く車内に響く。

鉈で枝を落とす時の音に似てるんだな——キールは後部座席の足元に転がされた二振りの剣に気付くのと、そんな事を思ったのは殆んど同時だった。

日常から離れたところにいる。その実感が、今更のようにキールの背筋を駆け抜けた。

……ああ、オレ。

オレ、本当に保護区域に——。

いつもより疾走気味の心臓を落ち着けるために、少年はひとつ深呼吸をした。

嗅ぎ慣れた砂の匂いに、今は僅かなガソリンの臭いが混じっている。首筋に砂が張り付いている感触があったが、それはいつもの事だ。慣れきった感触を感じられているなら、自分はまだそれほど緊張してはいない筈だ。キールはそう思い込もうと努めた。

頭に着けたままだったの作業用のゴーグルを下ろせば、そこに広がるのは見慣れた世界だ。薄く灰色がかったレンズ越しの、赤茶けた砂漠。乾いてひび割れた、砂まみれのどこまでもくすんだ世界。

だが、今そこにいるのはふたりのスクラッパーだ。

揃いのカーキベージュの上着を着て、黒いマスクを被った軍の犬——スクラッパーだ。

「お、中々かくくいーなー、そのゴーグル」

振り返ったクライムが、マスクの内側でしししと笑う。

そのマスクのレンズの中に映りこむ自分の姿を見付けて、何故なのだろう、その瞬間に初めてキールは悟った。

「……あんたらには負けるよ」

——ずっと、怖かった。保護区域の事が。

怖いと思って、それでもどうしても行きたかった、この場所。

なのに——慣れてるのかよ。こいつら保護区域に着いたってのに、全然、殺気立ったりもしない……。

それが尊敬なのか諦めなのか、キール本人にもよく分からなかった。

首からバンダナを外して、それで鼻と口を覆うように巻付ける。

簡易的だがこれで砂を吸い込まずにすむだろう。

指が震えて少し手間取ったが、少年はその事実気付かなかったフリをした。

怖気づいても、何も始まらない。行くと決めて、来たんじゃないか。

——行くんだ、行くから。

キールが仕度をすませるのを待っていたのだろう。図ったようなタイミングでシンが運転席のドアを開けた。

風がなだれ込む。砂の弾けるパラパラという音がそこかしこで反響した。

後部座席から降りながら、一瞬迷ってキールは転がされていた剣を二振りとも抱え上げた。

「う、わ」

キールは闇市で育った子供だ。だから小さい頃から巻き割りも水汲みも荷運びも、力仕事だろうがなんだろうが何でもやらされた。だからこそ少しばかり、普通の子供より腕力に自信を持っていたのだが——。

「危ねえな、コケンなよ」

後ろからクライムが両手で抱えてくれなかったら、キールは彼の言うとおりの場にひっくり返っていただろう。

剣は持ち上げただけでよろめいてしまうくらい重かった。ちよつと力に自信があるだけの十歳の少年の力では、抱えて歩くにも重過

ぎるくらいの代物だったのだ。

合金の塊だからそれも当然なのだが、刀も剣も見ただことすらない少年がそれを知る筈もない。よたよたとその場でたたらを踏んで、地面に剣の先を引きずる形になってやっと、キールは真っ直ぐ立つ事が出来たのだった。

「相棒くらい自分で持つから変な気イつかうなよ。武器だったらホレ、これ貸してやっから」

頭の上にゴツンと置かれた硬い物の衝撃に顔をしかめて、けれどそれに手を触れた瞬間キールは目に見えてうろたえた。

「こ、これ！」

「んー？ わかんねえ？」

笑い含みのまま、クライムはその物体をキールの目の前でゆらゆらと振って見せる。見慣れない形だが、どう見てもそれはハンドガンだ。

父親がソレを仕事で扱っているから、もっと大きくて物騒な見た目の物だって見た事がある。だが、キールはそれに触った事など一度もなかった。売り場に荷を運ぶ時でさえ、彼の父親は少年が武器類に触る事を許さなかったのだ。

理由は単純、危険な物だから。戦後出回った出来の悪いハンドガンは安全装置が外れやすく、やたらと暴発を起す不良品ばかりで、自衛のためにと買ったつもりがその為に命を落とすという事故はよく起きた。

だからこそ父親は、息子がそれに触れることを許さなかったのだ。それはこの世界においてまだ彼が幸福な部類の人間に入る、という証でもあった。

彼よりもはるかに幼い年齢でこの武器を渡されて、人を殺して金を稼いで来いと言われる、そんな世界だってこの世にはある。

「スクラッパーのって、軍用だろ？ 使っていいのか、失くしたりしたらさ——」

「別にいいだろ、時間稼ぎ用だからな。それにホントにヤバくなっ

たら、そんなモン何の役にも立たねえぞ」

「そう、なんだ」

俯いたキールの腕から革製の鞘に納まった長い剣を抱え上げると、クライムはハンドガンを差し出した。

受け取って、キールはまじまじとそれを見た。

いつも店で見る銃とはやはり形がかなり違う。大ききの割りに、握り手がやけに細いのだ。マガジンが細いのだろうか。しかしそれ以外にも何か違和感の多い銃だった。どうしてこんなにスライドが短いのだろう。バレルが殆ど剥き出しになってしまっている。

ふと、最近これと似た形の銃を見た事をキールは思い出した。いつだったろうか。そこまでは思い出せない。面倒くさくなって彼は考えるのを止めた。

ハンドガンはさらさらした磨りガラスのような触り心地だった。黒いボディにはあまり使い込まれた形跡がない。新しい物ではなさそうだから、大事に手入れをしているのかも知れないとキールは考えた。

随分と軽いから、素材は金属ではないのだろう。錆が一切見当たらないのもきっとそのためだ。

まだ小さい彼の手にはいささか大き過ぎたが、使い切れないほどではない。

「撃ち方分かるか？」

「たぶん。オートマだろ、これ。こう、ここ下げてスライド引いて、反動があるから、こう……構えて」

「へー、俺よか上手そうだな」

「射撃ヘタなのか？ 軍人なのに？」

「なっおまつ、別になあ、射撃ヘタでもいんだよ！ スクラッパはスクラッパだ。ガンマンじゃねえし」

腰のベルトに鞘の金具を繋ぎながら、クライムはふて腐れたように口を尖らせる。

そんなふたりのやり取りなど気にも留めずトランクを漁っていたシンも、ようやく二人分のダフルバッグを抱えてやって来た。

彼女は何も言わずにクライムにそのひとつを押しつけると、キールの腕に残る黒い刀を取り上げた。

「持たなくていい」

「……え」

かなりそっけない言い方と動作だったから、きつとまた怒らせたのだと思いキールは後ずさった。

マスクの内側の女の表情は分からない。ただ、キールが後ずさった瞬間、彼女もまた動きを止めた。

だが結局、シンは何を言うでもするでもなかった。

取り上げた黒い刀を背中に斜め掛けにして、そのまま何も言わずジープの後方へ歩き出す。

「……なんなんだよ、怖えだろ、もう……」

ぽつりと零れたキールの苦々しい独り言に、クライムはほんの少しだけ首を傾げた。

——今のアレはむしろ、氣イ使ってたんじゃないの？

ガキだからこんな重いモン持たなくていい、みたいな。

すれ違ふふたりの心情に気付きつつ、だが彼は気の利かない事に対する定評のある青年だったから、その事実をふたりに伝えてやろうとはしなかった。

クライムは行くぞとだけキールに言い、そして三人は壁伝いに進み出した。

ザクザクと、乾いた大地に足跡が刻まれていく。

ジープはどうやら急停車したものの、クライムが発見した『出口』から少し過ぎた所で停まってしまったらしい。喋らない女軍人の背中を見つめながら、あれだけの猛スピードで走ってたらそうなるよなど、キールはこっそり呆れていた。

——ふおおおおおおおん、
おおおおおおおん……。

壁が哭いている。
壁が咆えている。

灰色の壁は近くで見るとコロニーで感じていたより更に高い物だった。この壁は本当に“都市”を覆うものだったのだと、キールは改めてその事実を思い知った。

どれくらいの高さがあるのだろう。保護区域の壁は五十メートル超だと彼も聞いていたが、実際ここまで間近で目にとると本当に山のような。貧民街の端に立っている監視塔も確か三十メートルは超えている筈だが、そんな物この壁の前では大した建造物ではないと思えてくる。

見上げていると目が眩みそうだ。

キールは視線を平野に戻した。赤い大地はいつもの通り、砂を巻き上げた風が吹き荒れている。遠く見えるコロニーの影が陽炎のように揺らめいていた。

「……止まれ」

低い命令が鼓膜をたたいた。いつの間にか銃を構えたシンが、振り返って後方の二人を見ていた。

「クライム、後方の注意を。その子の保護もだ」

「あいよ」

急に張り詰め出した場の空気に戸惑ったキールも、すぐその理由に気付いた。

壁に——灰色の壁に、巨大な穴が開いている。乗ってきたジープでも通り抜けられそうなくらい、大きな壁の亀裂だ。

彼らが口にしていた出口とはこれだったのだ。キールは背中に冷たい物が走るのを感じた。

保護区域に行く、というのは単に近づく事ではない。
実際にそこへ踏み入らなければならないのだ。

オード・オート——人間を殺すためだけの兵器がまだ生きている
その場所へと、その恐怖と殺戮を終わらせるための進攻。

キールはゴクリと音を立てて唾を飲んだ。

鼓動が早い。息も浅い。それでも思考と感覚は澄み切っていた。

来たんだ、来たんだ。

本当に、ここへ。

灰色の壁へ、保護区域へ。行くんだ。

——エリトリア！

「これより突入を開始する」

「了解」

キールは何も言わず、だがしっかりと頷いて、着いて行くという
決意を示した。

じりじりと、三人は壁の裂け目に向かって進んでいく。

あと、五メートル。四メートル。三メートル。二メートル。一メ
ートル。五十センチ。三十センチ。十センチ……。

シンがほぼ壁に張り付くようにして、顔半分で壁の中を窺う。し
ばらく待つと彼女は無言でふたりに手招きをした。

クライムに背中を押され、キールは腰を屈めたまま壁の内側へと
滑り込む。後ろからクライムが音もなく着いてきて、彼は急にキ
ールの腕を掴むと近くの廃屋の中に素早く引きずり込んだ。

掴まれた腕の痛さに思わず声を上げかけたキールのその口も、す
ぐさまクライムの手で塞がれてしまう。咄嗟の事にキールは面くら
い、何事かと辺りを見渡そうとしたのだが、それも口を押さえられ
たままでは叶わなかった。

「……！！！！！！」

「悪いけど、ちょっと待てな」

マスクの口元に人差し指を当てて“静かに”のジェスチャーをし
てから、クライムはゆっくりキールの口から手を放した。

「……なんで……」

「こういう場所が一番、オード・オートと鉢合わせしやすいんだよ」
待ち伏せしてる事もあつからな、アイツら。

小声でそう言いながらクライムは剣を鞘に収める。間を置いて、
キールはその事に驚いた。

一体この男はいつ抜刀していたのだろう。全く分からなかった。

「……あの、女の人は？」

「反対側のボロ屋だ」

クライムは声を潜めて答えると、静かに碎けた窓の脇に忍び寄った。隙間から外を伺って、腰に下げたチョークバッグから何かを取り出す。彼はそれを壁面に貼り付けた。

その行動の理由も意味も、キールにはさっぱり分からなかった。
銀色に鈍く光る、手のひら程の大きさの薄い板。表面には青い回路
のような物が張り巡らされている。

見つめるキールの視線に気付いたのか、クライムがさっと振り返
った。

「剥がすなよ。大事な武器なんでね」

「これも？」

「そ、これも」

また外に向き直ると、彼は窓越しに手を上げて合図した。見れば、
反対側の廃屋の影で同じように合図を送っている腕が僅かに見える。
あの一瞬で建物の位置を見定め、丁度反対になる廃墟に彼女も侵入
していたのだ。全く何の合図もなしに、しかも自分まで抱えたま
ま。キールは目を見張った。

——コイツら、マジで戦場で生きてる、破壊措置執行官なんだ。
スクラッパー

「よし、進むぞ」

そう言ってクライムが窓際から離れた、その時だった。

「——伏せろッ!!」

シンの張り詰めた怒声が聞こえたのと、ふたりの頭上で何かが爆

ぜたのは殆んど同時だった。

それはあまりに一瞬の出来事で、キールは何が起きたのかも分からなかった。

ガラガラと建物の崩れ落ちる音の隙間。

きゅいイイんという、耳障りなノイズが聞こえた事だけは、何故か少年にもはっきりと分かった。

act・7【一時撤退】

ガラガラと激しい音を立て、頭上から屋根だったものが降り注ぐ。瓦とコンクリートの雨の中、今度は別の方向から激しい炸裂音が鳴り響く。

体中に容赦なく叩き付けられる瓦礫の重みと痛み、キールは激しい悲鳴を上げてしゃがみこんだ。落ちてくる物は破片とはいえ、彼の頭ほどもある物が殆んどだ。咄嗟に頭をかばったが、その時背中に大きな梁の破片が落ちてきた。

意識が飛んでしまいそうな痛みと衝撃。少年の悲鳴は鈍く途絶える。

——イヤだ、こんな風に死ぬなんて。

痛みの狭間でキールは思う。

——死にたくない。

産まれて初めて、少年はそう神に祈った。

また今度は、キールのすぐ後ろで何かが弾け飛ぶ。どうやら壁がやられたらしい。ギュツと目を瞑って丸くなっていた彼にもそれは分かった。

爆風、瓦礫、砂埃、灰色、痛み、口に広がる砂と血の味。

立て続けにノイズが聞こえた。屋根が落ちてくる前にも聞こえた、あの耳障りな——。

「逃げとけクソガキッ……！」

瓦礫の雨がまだ降り止まない中、不意に男の声がした。切羽つまつた響きと、ぐいと襟元を後ろから持ち上げられる浮遊感。

キールは投げ飛ばされて始めて目を開けた。何故か酷く右目が見えにくかったが、自分を投げ飛ばした人間が誰なのか、それはどうか瞳に収める事が出来た。

「兄ちゃ……！」

呼びかけは少年が地面に落ちた瞬間に途切れ、そして呼ばれた男は振り返らずに瓦礫の中へと飛び込んでいった。褪せた金の髪が、煌めく鉛色の刃が、粉塵の灰色に紛れて消える。

建物はバラバラだった。元々殆んど崩れたような建物だったが、今は屋根から側面の窓側までごっそりと抉れたようになっていた。火事場の煙のようにもうもうと粉塵が巻き上がるその奥で、大きな影がゆらりと動いた。

キールは倒れたまま、首を仰け反らせた。

今のは何だ。見間違いないければ、あれは。

「回避する」

耳元で酷く抑揚のない声が囁く。驚いたキールが振り仰ぐ間もなく、彼は声の主の肩に抱え上げられ、その場所から逃げ果せた。

——ああ、またなんか壊れた。

廃屋の路地をを駆け抜けるスクラッパーの細い肩の上で、キールは遠ざかる倒壊の音を聞いた。

子供ひとりを担いでいると言うのに、スクラッパーはかなりの速度で入り組んだ道を走っている。息は少々乱れていたが歩調に危うさが全くない。

自分を抱えている人物——顔を見るまでもなくもうひとりの女軍人だろう——は確かに女の人って聞いてたけど、やっぱり嘘でも付かれたんだろうか。自分と大して変わらない大きさの人間を抱えて、こんな風に走れる女なんている訳がない。

痛みのさなか、場違いなくらい冷静な部分でキールはそう思った。

「息は、あるか」

「……死んで、ね……よ……」

砂が喉の奥に張り付く感覚に、キールは堪らずむせ返る。少しだけシンは走る速度を落とした。しかし彼女は決して止まろうとはしない。追いつてられるように彼女は路地を走り続ける。

空はいつの間にか青から橙色へと柔らかなグラデーションを描い

ていた。狭く建物が密集した路地に夕日が射す事はない。薄暗い廃屋の影だけが長くどこまでも続いている。ごうごうと耳に響く風の音にはやはり、砂粒の立てる微かな音が混じっていた。

振動が絶え間なくキールの痛む背中をを刺激していた。

だがそもそも、体中が痛むのだ。

今更のようにジクジクと痛みを訴える打ち身に擦り傷切り傷、右目の視界の悪さも今なら分かる。頭の傷口から流れ出た血が、ゴーグルのレンズを覆うまでに流れているからだ。

傷口にはに砂埃やら先ほどの粉塵やら、色々な物が張り付いているのだろう。ゴーグル越しの視界は赤よりも茶色と黒に近い。

最悪だ、とキールは思う。

傷に巻いておける布がない。額の傷は血が止まりにくいのに。あれ、それよりも傷を拭けない方がマズいのか？

頭の横でカチカチと音を立て、刀の柄が揺れている。黒い柄に、黒い鍔に、黒い鞆。鍔には機械の歯車に似た飾りが付いていて、それが女の背中で跳ねる度、硬質な音を立てている。

——ちくしょう、いつてえ。でも気絶する程じゃねえ。けど痛い。な。そういえば日が沈んだら、こんなカッコじゃ寒いんじゃないか。ソレよか、親父に怒られるかも。今日の内に帰るつもりだったのに。——ああ、何考えてんだ、こんな時に。オレやっぱ混乱してんのかな？

唐突にシンが足を止めた。キールはまだ咳き込んでいた。

「降ろすぞ。痛む箇所は」

「せ……せな、カ、が……っ！」

もう一度激しくむせ返ったキールを、厳しい顔をした女軍人は意外なくらい優しい動作で壁にもたせかけた。

少年の小さな背中をみ、確かめるように撫で擦る。少年の咳が止まると、彼女は乱れた息を整えるように一度小さく息を吐いた。束ねた黒髪は風で酷く乱れたようになっていた。けれどそれ以外、シ

ンはほぼ無傷だった。

「打ち身だ」

「そ、か」

ふと、彼女は脇に抱えたダッフルバッグを開けて生成りの布を引っ張り出した。マスクで表情を窺う事は出来ないが、なにか慌てたような手付きだった。

「……傷が」

「え、ああ。頭？」

彼女はその幅広の布を広げ、グルグルとキールの頭全体を覆うように巻きつけ始めた。

頭に布が触れて初めて、キールは傷口の範囲を思い知る。どうやら額から頭頂部までかなり長く切れてしまっていたらしい。通りで視界が無くなるほどの血が出る訳だ。奥歯を噛み締めて少年は痛みを耐えた。

布を巻き終わると、シンは少し迷ったように血で曇ったゴーグルを眺め、それをそっと袖口で拭った。

なんとなくその行動が意外で、キールは明るくなったレンズの奥で目を丸くした。

「非感知領域を張ろうとしたが、破壊されてしまった。……すまない、巻き込んだな」

ステルス。それが何かキールにはよく分からなかったが、抑揚のないシンの声に滲む後悔のようなものを感じて、彼は少しおかしくなかった。

何も、彼女を責めるつもりはないのに。

保護区域で人が怪我をするのも死んでしまうのもよくある事だ。そんな事子供だって知っているのに、まるで何もかも自分のせいだと言うような雰囲気がある。

この人も案外、あのスクラッパーの青年と変わらないのか。こんな状況だというのに、キールは少し噴出しそうになった。

——ヘンなの、変わってら。

「ここ、戦場なんだろう？　もしかしたら、こうなるかな……って、思ってたから、さ」

いいよ。オレが決めたんだ、しょうがねえもん。

無理矢理に口の端を歪めて、キールは笑って見せたつもりだったが、それは苦笑いにすらなっていなかった。

マスクの奥でシンは眉をひそめる。深い傷が無かったのは幸いだが、随分と消耗しているようだ。そもそも子供の体力ではあまり長くは逃げ回れそうにない。

「――……半径百四十六メートルだ」

「え」

「この範囲を超えればオード・オートの生体検知器から離脱する。検出範囲に二体以上の反応があった場合、静止状態の長い個体へ順次直接攻撃を行う」

「な……なに、それ？」

「奴らの特性だ。私と居てまたオード・オートと対峙してしまった場合、すぐに『外』へ逃げろ。ジープで時速八十キロ以上。それで完全に撒ける」

「……アンタ達を置いてけ、って事？」

「分かったか」

キールは戸惑いながらも頷いた。マスク越しにも彼女の声の威圧感は少しも薄れていなかったし、それに何より、言葉には有無を言わせない切迫した物があった。

「手を貸す。立てるか」

「大丈夫……いけるよ、平気」

思いのほか力強く両腕を引かれ、キールは勢いよく立ち上がる。

背中がズキリと痛んだが歩けない程ではない。

立ち上がって間近でみる女軍人は、やはり彼より少し背があるだけの小さなスクラッパーだった。これであれだけの距離を自分を抱えて走って来たのか。もと来た路地を見詰めて、キールは少し恐ろ

しいような気持ちになった。

この人がそこまで力のないただの女性だったら、自分はその場で死んでいたのだろうか。

——エリトリアは、だから死んだのだろうか。守ってくれる、助けてくれる大人なんて、誰もいなくて。

保護区域は戦場だ。未だ、戦争の終わっていない、戦場だ。

だがそれをどうにかしようとする者は、果たして今まで本当に居たのだろうか。

査察官は定期巡回に来るものの、あの事件が起こるまでは破壊^ス処^ク置^ラ執行官などただ彼らの護衛にすぎなかった。第四十一保護区域の^{ラッパ}自動式重機甲兵器を破壊するなどと言う話は、今の今まで放^{オールド・オート}つて置かれていたのだ。

大きな軍隊が首都にあるのは知っている。けれどそれは首都を守るものであって、生き残った辺境のコロニーまではやって来ない。絶対に、来ない。今回のように。

何か起こるかも知れなくても、例え何か起こったとしても、やってくるのはほんの僅かなスクラッパー。

終わらない戦場。

その言葉の裏に潜む世界の怠惰に今更ながら気付いて、少年はきつくこぶしを握り締めた。体の奥から震えが湧き上がってくる。

怒りと恐怖と高揚感のない交ぜにしたような感覚に、キールはただ震える事しか出来なかった。

「一旦、隠れられる場所を探す。行くぞ」

こくりと小さく頷いて、少年はスクラッパーに片腕を支えられるまま歩き出す。彼が震えている事には気付いていた筈だが、シンは何も言わなかった。

人の気配が消え去って久しいであろう細い路地を歩く内、ふたりは大通りの跡らしき場所に出た。どうやらここでオールド・オートは

昔、派手にやらかしたらしい。

石畳には砲撃の跡がまざまざと残っている。そもそも完全に吹き飛ばされてなくなっている箇所の方が多い。立ち並ぶ町並みは遥か以前には美しい物だったのだろう。しかし今はもう、全てが破壊された痕跡しか見えなかった。たまにこれと分かる店の大きなショールームやインドウやタイルで飾られた古風な建物もあるにはあったが、良くて半壊というところだ。

どこもかしこも砲撃の穴や焼けた跡だらけで、灰色のコンクリートがむき出しになっている。色を添えているのは赤茶色の砂だまりだけだ。破壊の跡は風化して、一切の人の気配を消し去っている。

安いペーパーマガジンの言葉を借りるなら、ここはまるでゴーストタウン。——いや、実際にここは死の町だ。

ここで昔、戦争があった。たくさん逃げることのない人間が殺され、そしてここは死神の住まう閉ざされた廃墟の森となったのだ。

——おおおおおオオん、

ふおおおおおん……。

灰色の壁が咆哮する。西日の逆光になった壁は、今は黒い影に覆い尽くされている。

先程の唐突な攻撃など嘘だったかのように静かだ。ふたりの足音は風の音に紛れて聞こえない。そういえば倒壊音も随分前、シンが走っている内に聞こえなくなっていた。

あのスクラッパーはどうしたのだろう。

腰のベルト通しに下がっていたハンドガンに触れ、キールはふと不安になる。破壊された建物に飛び込んで行った後ろ姿が脳裏に蘇よみがえった。

「……兄ちゃん、大丈夫かな」

ポツリとキールが呟いたので、シンは小さく頷いた。赤い日の光が、彼女の黒髪の上で煌めいた。

「一体を撒くくらいなら容易い。あれは経歴も長い」

「撒く？」

「倒すには難しい。クライムから、銃を受け取ったな」

驚いたキールは立ち止まって叫んだ。

「まさか……兄ちゃん、銃、これしか持ってないのか！？ そんな、それじゃ——」

「銃がなくても対応は出来る」

「でも！」

「大丈夫だ。あいつなら、剣だけでも問題は無い」

振り返りマスク越しに見詰めてくるシンの目は、静かな色をしている。確かな確信をそこに認めて、キールは僅かだが安堵した。

そういえば、このスクラッパーも背中に刀を背負っている。実際の戦闘ではあまり役には立たないシロモノだと父親はそう言っていたが、何故ふたりともそんな面倒な武器を持っているのだろう。

少年が歩き出さない事に気付いて彼女も立ち止まる。

少しだけ考えるように視線を遠くにやり、しばらくして向き直るとシンは口を開いた。

「……相棒だ。信頼できる」

「相棒？」

「行くぞ」

オウム返しにキールは訊ねたけれど、シンはそれには答えずまた歩き出した。

相棒——一体どちらの事を言ったのだろう。

刀の事か、あのスクラッパーの男の事か。口調になんの迷いも無かった。

小さな背中に背負った刀の上で、長い黒髪が風になびいた。堂々とした後姿は小柄な体付きを補って余りある程の力強さに満ちている。

古い神話に出てくる勝利の女神^{ニケ}とは、こんな人物を言うのかも知れない。

スクラッパーの後を追いながら、少年は漠然とそんな事を思った。

act・8【ナイトホークス】

夕焼けの赤が廃屋の群れを静かに照らし出している。

吹き始めた夜の匂いのする風は、早くも冷たさを増してきていた。

「合流は……まア、できればってトコか……」

呟いて男は頭を掻く。

色素の薄い金髪の頭から、ぱらぱらと砂が零れ落ちた。

大通りの跡を行く内に少年とスクラッパーは珍しい建物に辿り着いた。

「これ……教会、てヤツ？」

「ああ」

シンの反応は相変わらず淡白だったが、それも気にならない程キールは驚いていた。

「本当にあったんだ。親父から聞いた事あったけど……本物、初めて見るよ……」

それは大きな聖堂の跡だった。珍しい屋根の高い建物である。平屋の多いこの地域では中々見られない、ずっと伸びた円錐状の屋根が印象的だ。だが意匠を凝らした外壁のレリーフや、以前はステンドグラスのはめ込まれていたであろう大きな窓も、今となっては見る影もない。

この教会はきっと第四十一区域の中でもとりわけ大きな建造物の部類に入るだろう。住人達は戦時中、ここを避難場所にした事があったのかも知れない。たくさんの住人を一度に収めるのにこういう場所は持って来いだ。

神を奉る場所ならなおさら、人々はこぞって訪れただろう。

——戦火がそこまでせまってるってエのによ、お袋、ここなら平気だって礼拝堂から動かなくてな。結局そこで別れたっきりだ。

知らなかったのさ。

アイツらまさか、保護区域の中の人間を殺るだけに送られたモンだったなんてなア……戦争終わって、知ったんだよ——。

そんな祖父の昔話が、不意にキールの脳裏に蘇った。

オード・オート

アイツらなら、それこそ神のお膝元だって容赦なく攻撃するはずだ。心なんてない、アレは機械なんだから。

廃墟になった教会の無惨な姿がそれを静かに物語っている気がして、ふとキールは腹の奥に氷を投げ込まれたような気分になった。

先ほど、この女軍人はなんて言っていた？

確かそう——“検出範囲に二体以上の反応があった場合、静止状態の長い個体へ順次直接攻撃を行う”——と。

「……ねえ」

「なんだ」

「オード・オートが来てさ……みんなでこんなトコに避難して、立て籠もったりしたら、どうなるんだ？」

「……」

彼女は答えなかった。振り返る事もせず先に行くシンを追いながら、けれどキールはその答えを悟ってしまった。

だから——ここはどこよりも、一番ボロボロに壊されたんだ。

外壁には大きな穴が開いていて、三棟あった筈の高い円錐の屋根も、今はひとつしか原型を留めていない。

砕け散った教会の中にも夕日は差し込んで、暗い影はより深くそこに染み付いていた。見通すことの出来ないその影の中に今も死んだ誰かの姿が見える気がして、キールはそこから目を逸らした。

エリトリアは、どこに逃げたんだろう。

置き去りにされた彼女は、こんな場所でどこまで逃げられたのか。考えたくないことばかりが少年の頭を掠めてゆく。なるべくもう何も考えずに、今はこのスクラップパーに着いて行く事だけを考えなくては。

そう思うのにキールは気がつくとその事ばかりを思っていた。

スクラッパーは保護区域を“廃墟の森”とそう呼んでいる。
ぴったりだ。ぴったり過ぎて、憂鬱になるくらいに。

キールは小さく歯を食いしばった。日が傾いて照らし出された町並みはどこもかしこも暗い破壊の跡で覆い尽くされていて、それがすべて開いたままの墓穴に見えてしょうがなかった。

保護区域の中にと、どこからでも灰色の壁は良く見える。

遠吠えのようなあの音も風が強くなるにつれ長く尾を引くように空に響き渡っていた。

——おおおおおオオん、
ふおおおおおオン……。

「あそこにしよう」

何の前触れもなく前に行く女軍人が立ち止まった。

追いついたキールに振り返ると、彼女はすぐそこにある比較的屋根と壁の残った廃屋を指差す。

「中で待っている」

「姉ちゃんは？」

マスクの内側で、一瞬、彼女は驚いたように目を丸くした。今までの軍人然とした行動や発言からすれば、それは意外なくらいに感情の籠った反応だった。

「……先に非感知領域^{ステルス}を張る。あとで行く」

「そっか」

「お前」

「え？」

「……いや、構わない」

何が構わないのかは分からなかったが、彼女が建物の横でなにやら作業を始めたからキールは中で待っているという指示通り先にある中に足を踏み入れた。

ここはどれくらいの間このままにされているのだろう。

荒れきった廃屋の中は確かにもう人の気配は消え去っていたが、一晩のねぐらとしては申し分のない所だった。

夕日はもう随分傾いて中の様子はあまりよく分からない。だが要は風を防げる屋根と壁がしっかり残っていればよい、という事なのだろう。

そう考えながら、キールは屋内を手探りで進んでいった。

砂漠の夜は冷える。特にここは海から近いのだ。夜風に一晩中さらされたら、休むどころか生きていられるかどうかの方が心配になる。

しかしここならそんな事に怯えなくてすみそうだ。

奥に進むと、割と大きな一続きの部屋があった。表側には少々砲撃の痕があったのだがこの部屋には特にそういった痕跡は見られなかった。いささか机やら何やらが散乱しているものの、それを退かせば足を伸ばして横になれる程の広さはあるそうだ。

明かりなどないから部屋は殆ど真っ暗である。仕方なくキールは手探りで、適当にそこら中に転がる物を退かしていった。

背中が鈍く痛むのは変わりなかったが今は先程よりも辛くはない。大きな音を立てるのはあまり良くないだろうと考えたから、なるべくそっと、キールは大きな机を壁際に押しした。

「……ってえ……！」

だが肩に力を入れた途端、少年の口から出たのは悲鳴だった。

腕を前に押し出すような姿勢を取ると、肩の下あたりの痛みが強くなる。あの時、急襲で受けた傷の中でもしかしたら一番厄介なのはコレかも知れない。キールは顔をしかめながら背中に腕を伸ばした。だが、ほんの一秒もその体制を保つ事は出来なかった。

血は出てはいないようだし骨が折れているような感覚もないが、これではいざと言う時に全力で走って逃げる事も難しいかも知れない。

脈打つように痛む背を丸めて、少年はしゃがみ込んだ。

ふとその背後でかちりと音がして、暗い部屋に薄青い光が差した。
「どうした」

細い携帯用照明を手にしたスクラッパーが、彼を見下ろしていた。
「ちよつと……コレ動かしてたら、背中、痛くて」

「……残りはやる」

そう言っでちらりと辺りを見渡すと、シンは手にした照明をキールに手渡した。

「――え？」

「少し待て」

そうして少年の見ている前で、彼女は先程キールが動かし損ねた机を持ち上げると軽く壁際に立てかけてしまった。ついではばかりに辺りの細々した散乱物も運んで、あっという間に部屋にはふたり分以上のスペースが出来上がっていた。

ぽかんとしているキールから照明を取り上げ、シンは今度はさらに奥へ続く部屋へ向かって歩き出す。

「あ……え？　　ちょ、ちよつと」

「座っている」

やはり彼女は振り向きもしなかった。

明かりを持っていかれてしまったから、結局部屋はまた真っ暗になっている。そんな状況では動けるわけも無く、結局キールはおとなしく座って待つほかなかった。

ほんの数分でシンは戻ってきた。戻ってきた彼女の手には明かりだけではなく、大きな布の塊が抱えられていた。

「何、それ？」

「寝床代わりにはなるだろう」

カーテンだったようだが、と付け加えて、彼女はそれを手早く床に敷いた。たためば僅かではあるが厚みも出る。

ちよつと子供一人分の大きさにそれを整えて、シンはその向かいに座った。ゴソゴソとダッフルバッグを漁り中から水筒を取り出すと、彼女はそれをキールに突き出した。

「飲んだら寝ろ」

「……姉ちゃんは？」

「私はいいい。寝ろ」

背中が痛む、なんて言ったから気を使われたんだろうか。そうは思ったがやはり横になれるならありがたい。

言葉に甘えてキールは水を少し飲んでから、その簡易な寝床に横になった。喉を潤せるとやはり落ち着く。この寝床もやわらかくは無かったが、横になって体の力を抜けるだけで随分と楽だ。

ほう、と深いため息を少年は吐いた。

建物の中に風は吹かない。それでも外からは、絶え間なく壁の鳴く声が聞こえている。

向かいに座ったシンも少し水を飲むと、また小さな明かりを頼りに鞆の中から様々なものを取り出した。

床に並べられていくつかの物の中に、あの青い回路が張り巡らされた小さな銀色のプレートを見付けて、キールは思わずあっと声を上げた。

「それ」

「……なんだ」

「その板。それ、なんなんだ？ 兄ちゃんもあそこで壁に貼ってた」

「ステルスだ」

それが何か分からない、という考えがありありと表情に出ていたからだろう。

少し眉根を寄せて、しかし彼女はぽつりと答えた。

「これを起動させると、オード・オートの検知機能を一時的だが回避出来る」

「見つからなくなる、って事？」

「ああ」

「……でも、あそこで襲われたじゃないか」

「条件がある。四方向からポイントを置いて空間として設置しなけ

れば、非感知領域としての意味を成さない」

分かりにくい答えにキールは首をひねるしかなかった。

なんとなく分かったのは、あの時のやり方ではどうやら途中だったらしい、という事だ。

あの時クライムは壁に一枚のプレートしか貼っていなかった。向かいにいたシンが同じ事をしていても、二枚。それではいけなかったという事だろう。

「でもなんであんな所に、ステルス？　だっけ。しようとしたのさ？」

「出入り口を封鎖しておく事が目的だった。戦闘中の目くらましとしての使い道もある」

「へえ……」

「今回は、失敗したが」

少し苦い顔で、シンはそう締めくくった。

会話を続けてくれる様子がなかったから、仕方なくキールも少し黙ることにした。

黙々と彼女は作業を続けている。例のステルス以外にも、似たような赤い回路のプレートや、見た事もない機器類、そしてキールの持たされた物と同じ銃がそこにはあった。

結局、あのスクラッパーの兄ちゃん、どうしてるんだろう。

日が落ちれば動きにくだけでなく、こちらの事も見付け難くなるだろう。合流はするつもりなのだろうか。オード・オートを撒く事は出来ると言っていたが、撒いた後でまた見付からないようにこちらを探すのはどう考えても骨が折れる。

上手く逃げて——どう合流するのだろうか。こんな広い廃墟の森で。そんな事を思いながら、いつの間にかキールは眠りに就いていた。

鈍く背中が疼いている。

泥のような眠りの中で、キールは懐かしい日の夢を見ていた。

監視塔に向かって少年は駆けて行く。彼は塔の前で水を運んでい

る少女を見とめると、日に焼けた頬を紅潮させ大声で彼女の名を呼んだ。

“エリトリア！”

“キール。今日も早いね”

にこりと笑った彼女を見て、少年はくすぐったいような気持ちになった。みつつ年上のエリトリアはどちらかと言えば年のわりに小柄で、キールと並んでも同じ年の頃に見えた。

焼けた肌の色もよく似てる。違うのはふわふわと長く伸びた赤髪と、鮮やかなブルーグリーンの瞳。それは監視塔に住む彼女の叔父も持っている特徴だった。

“燃料、おととい持ってきた分でまだ足りてる？”

“うん、大丈夫みたい。ありがとうっておじさんに言って置いて。”

最近首都からの補給遅れてるから大変だったの”

“そうなんだ。やっぱ当てにないなあ、お役人サマなんて”

“そんな事、管理官がきた時に言っちゃダメだよ”

そう言いつつエリトリアも笑っている。キールはいたずらが成功した時のようにシシシと笑った。

コロニーに風が吹く。空は晴れていた。乾季が始まったばかりだからだろう。しばらくは砂嵐もなさそうだとキールは思った。

“……あのね、キール”

エリトリアはふと、少し寂しげな声で幼馴染の少年を呼んだ。晴れの空が一瞬で曇ってしまうような、押し殺した悲しみを感じる声だ。

夢のさなかでキールは思い出した。

これはあの時の夢だ。そうだ、あの時の。

ああ、聞きたくない話が始まってしまふ。

“急な話でね。わたしも、ビックリしたんだけど……ルーフス叔父さんがね、今度の視察でここの駐在期間が終わるんだって”

“……終わる？”

“うん。だから……今度、管理官の人達と首都に戻る事になっちゃった。わたしも一緒に”

何も言えずにキールは立ち尽くした。

行かないで、なんて子供じみた懇願は出来なかった。こんな厳しい場所よりも、首都に戻るならそちらの方が確実に彼女のためだと、少年は知っている。自分が何も出来ない小さな子供だとも、彼は気付いていた。

“……そう、なんだ。……でも、じゃあ、良かったじゃん！首都になら学校もあるんだろ？　ホラ、エリトリア地質の勉強したいって言っただろ、出来るかもよ”

“でも……”

“俺はバカだから簡単なもんしか読めないし書けないけどさ、エリトリアなら学者にだってなれるんじゃないの？　前に、なんだっけ忘れたけど、スゴく難しい本読んでたじゃないか”

“……キール——”

“だからさ、どこ行っても大丈夫だろ。エリトリアなら！”

口を挟まれないようにキールは一気にまくし立てた。さよならだけはまだ、聞きたくなかったのだ。

まだ、それだけは聞く覚悟が出来ていなかった。

“……うん。がんばるね”

さびしくなるけど。

そう言っただけの目を細め彼女は笑った。無理やりにと、そう言っただけの頼りない笑顔だった。

——ああ、知っていれば。

これから起こる事を知っていれば、無理にこんな大人びた言い訳なんてしなかった。小さい子供のように泣いて暴れて、行かないでとそう伝えたのに。

すきだから離れたくないんだと、そう伝える事も出来たはずなのに。

監視塔を吹き抜けた風は遠吠えのような音を立てて空に消える。

雲の少ない日だった。深い青紫色の空はどこまでも澄んでいた。

“じゃあ、また明日な！”

“うん……また、明日ね。キール”

また明日と言いつけるひとときがどれだけ価値ある物だったか。

今なら言える。大事だった。大切だ。まだ、今も。エリトリア、行かないで、どこにも――。

「……ここにいて……」

自分の口から零れた言葉にハッとしてキールは目を覚ました。

いつから眠っていたのだろう。外した覚えもないのにゴーグルが頭の横に置いてあった。体を起こしかけて、キールは更に気付く。カーキベージュのブルゾンが肩に掛けられている。

見れば、向かいに座るスクラッパーもマスクを外して作業に没頭していた。ブルズンは間違いなくシンのものだろう。現に今、彼女はくすんだ灰色のインナーだけの格好になっている。

薄暗い簡易照明に照らされて腰のベルトに付けられた細長い鉄の塊が鈍く光っていた。あれはきつと爆弾か手榴弾だ。キールはそれと同じ物が店の奥にあるのを知っていた。

――今の寝言、聞かれなかったのかな。

横になっているこの場所からは横顔しか見えない。キールが起きた事に気付いているのかも知れないが、彼女は視線を手元に視線を落としたままだ。

「ゴメン、上着……姉ちゃん寒くない？」

声を掛けるとシンはちらりとキールを見た。が、いやと言っただけでまた視線を元に戻してしまった。

しかし明らかに夜の寒さはこの建物の中にも迫っている。だといふのに彼女の着ているインナーは身体のラインが分かるくらいには厚みがないのだ。

怪我人だから気を使われている、というのが分からないわけではなかったが、キールは半身を起こして上着を肩から外した。

「寒いよ、どう見ても。返す」

「いらん」

「……でも姉ちゃん、身体冷えたらいざって時動けないじゃんか。着てよ」

視線が合った。黒目がちな瞳は剣呑だ。

しばらく睨み合いが続いたが、結局折れたのはシンだった。彼女はため息混じりに上着を受け取ると、それに袖を通した。

「もう少し、休んでいろ」

「うん」

「しばらくしたら出る」

あまりに突然な知らせにキールは目を丸くした。

「出るって――」

「時間だ。ステルスが切れる」

思わずキールは肩を強張らせた。そうだ、何故忘れていたのか。今ここで眠ったり休んだり、そんな事が出来るのはオード・オートを倒したからではない。目隠しになる場所の中にいるからだ。そこを一步出してしまうばそのすぐ側で、アレは待っているかも知れない。

鉢合わせになればそれこそ、あの急襲の二の舞だ。

恐る恐るキールはシンの様子を伺った。

「……あとどれくらい？」

「お前が眠って六時間ほど経つ。もって、後三十分もない」

自分がそんなに長い時間寝かけていたという事と、あまりに少ない残り時間に驚いてキールは言葉をなくした。

横になったところでもう全く休める気がしない。それに結局、もうひとりのスクラッパーの姿はここにはないのだ。合流出来ていないこの状況でオード・オートに応戦できるのは間違いないシンひとりだけだろう。

「もう出来ないのか？ その、ステルスって……」

「一枚無駄にしてしまったからな。クライムと合流しない限りは無理だ」

残った僅かな希望も打ち砕かれて、キールはもう何も言えなかった。

銃を受け取っているとはいえ、これは“時間稼ぎ用”だとあのスクラッパーも言っていた。戦力にはとてもならないはずだ。

今度こそ本当に、死は近くに迫っているだろう。キールはゴクリと唾を飲んだ。

——おおおおおオオん、

ふおおおおおおん……。

遠く、灰色の壁の慟哭が響く。

シンは組み立てていた幾本かの鉄の筒をベルトに挟んだ。立ち上がりてきばきとマスクと刀を身に付けると、彼女はここに来た時と同じ“スクラッパー”の姿に戻っていた。

「……なあ、兄ちゃんは」

「これから合流する」

「どうやって？」

「呼ぶ」

——呼ぶ？

困惑気味に見上げると彼女はマスクを被った顔を少年に向けた。レンズの中の瞳がどんな物なのか、暗い照明の光では確かめる事も出来なかった。

もしかしたらこの簡易照明も切れる寸前なのかも知れない。夜に侵食された廃屋は、夕刻よりさらに深い闇に包まれている。

暗がりに見るスクラッパーの姿は妙な気迫を漂わせていた。黒く見えるレンズがどこか機械的で、キールは今まで話していた女軍人

が急に違う何かが変わってしまったような気分になった。

「それを付けておけ」

シンはキールの傍らに置かれたゴーグルを指差して、照明を持ち上げると部屋の出口に向かって歩き出した。

「どこに――」

「少し待て」

低い声でそれだけ命じて、シンは部屋から出て行った。

辺りにオード・オートがいないか偵察に出たのだろう。キールは暗闇の中に座ったまま、息を殺して待った。まだステルスは切れていないはずだが、暗闇の中にあのノイズが聞こえたらと――そう思うと息を潜めずには居れなかったのだ。

時刻がどれくらいなのかはよく分からないが、日が沈んでから六時間以上経っているのは確かだろう。それでもまだ日の出まで確実に時間がある。乾季の間は日の入りは遅く、日の出は早い。しかし空が白むにはあと一、二時間かかるはずだった。

この暗い中でどう戦うつもりなのだろう。

キールはただの貧民街の子供だ。軍人は見た事があるだけで、戦いのその現場など立ち入った事も、ましてやその戦闘に参加した事などあるはずもない。

どうしたらいいだろう。

何をするべきなんだ？

こんな時どうすればいいかなんて――想像した事もなかった。

自分ひとりなら、もしかすると諦めていたかも知れない。だが今、そうではないのだ。

その事実がキールの思考を“生き延びるため”に動かしていた。

まだ、自分は生きているし、まだ、スクラッパーのひとりは負傷もせずに健在だ。武器もある。身体だって動く。

まだ、生きられるはずだ。

それは意地にも近い希望だった。

部屋の間口にゆらゆらと揺れる光が見えた。シンが戻って来たのだ。

現れた彼女は小さく手招きして、キールが立ち上がるのを待っていた。

「近辺には反応がなさそうだ。おそらく検出範囲からも離脱している。出るぞ」

「……俺」

「なんだ」

「俺は、どうすればいい？ こっから出たら……アンタの邪魔にならないようにした方がいいのか？」

少年の瞳に宿るのは生き延びるための決死さだ。

シンは少しの間、動かず何も言わなかった。

沈黙の隙間に遠く風の音が響く。

何も言わないまま彼女は腰のベルトから一本の鉄の筒を取り外すと、それをキールに差し出した。

「これって」

「擬態弾だ。上のタブを外して約三分、オード・オートの感知機能に『生体反応』の錯覚をさせられる」

「逃げるために使うヤツ？」

「ああ」

「……これもサイアクの場合に、って事？」

彼女はまた少し黙ったあと、マスクを半分上げてキールを直に見た。黒い瞳と深い眉間の皺。シンのその表情は、やはり少年の知っているどの女性の顔とも違っていた。

「前方に出ようと思うな。離脱出来る道を常に考えろ。それを見失えば、死ぬぞ」

「姉ちゃんは……でも戦うんだろ？」

またマスクを被り直すと、シンは答えた。

「スクラッパーだからな」

通りはやはり暗く、空には星が浮かんでいた。晴れているのは不幸中の幸いだろう。完全な暗闇の中では動きようもない。

建物を一歩出る緊張感は尋常な物ではなかったが、出てしまうとそれは考えていた以上にあっけない出発だった。

煌々と光る青い星が彼方に見える。凍るような夜空を見上げて、キールはひとつ息を吐いた。バンダナの下で竄った息が熱く感じる程、まだ辺りは冷え切っている。

前に行く小柄なスクラッパーは、夜の廃屋を縫うように足早に進んでいた。気をつけて追いかけていかないと、すぐ後ろから追っているキールでもその姿を見失ってしまいそうだ。

しかし休んだ甲斐があったのだろう。背中の痛みは小走りに進んでも身体を苛むようなものではなくなっている。

夜風に細く、壁が咆えた。

暗い通りを行く内に、キールはこのスクラッパーが辿っている道が見覚えのある物だと気付いた。あの襲撃のあと、隠れる場所を探して歩いた通りだ。

と言うことは――。

彼の予想は当たっていた。進む内に、その建物が見えてきたのだ。崩れかけた大きな外壁。夜の空に黒々とした影を投げかける、それは夕暮れに見たあの教会だった。

教会の脇に辿り着くと、スクラッパーはするりと物陰に入り込み少年を手招きした。

側に寄ったキールにマスクの顔を近付けて、彼女は早口に言った。

「静止状態が続けば攻撃対象になる、という事は理解しているな」

「う、うん」

「常に動いている事、私よりオード・オートに接近しない事。ふたつは必ず実践しろ」

「……うん」

「最悪の場合この通りを真っ直ぐ進み、突き当たり壁を左へ。出口

まで五百メートル程度だ。覚えておけ」

壁の前に停まったジープを思い出して、キールは頷いた。

ああ——でもどうか、それに乗って独りで逃げなければならぬような、そんな事が起こりませんように。

スツとスクラッパーが立ち上がった。

夜風に束ねた黒髪が大きくなびく。

「少々目立つが、奴を呼ぶ」

「兄ちゃんを？」

「両方だ」

両方。その意味を彼が思い知ったのは、スクラッパーが急に振りかぶり、夜空に向かって“それ”を投げ上げた後だった。

ヒュツと風を切る音がしてその塊は夜空に紛れ、数秒後、激しい閃光を放って炸裂したのだ。

金属の弾ける耳障りな音と雷のような光が、教会の高い屋根の輪郭を夜空に浮かび上がらせた。

こだまのように響く音に耳を塞ぎながら、キールは信じられない物を見る目でスクラッパーを見上げた。

「あ……アンタ、おい、こんな事したら……!!」

閃光が収まると辺りは元の闇に覆い尽くされた。だが、状況が一変しているのは言うまでもない。

暗がりを息を潜めて進んで来たと言うのに、今まさに、それを覆す事を彼女はやってのけたのだ。この派手な目印に、アレは気付かないわけがない。

「お前は何か勘違いしているようだ」

静かにシンが言った。マスクの中に押し込められた低い声は夜風に紛れて消えてしまいそうで、だが妙な響きを孕んでキールの耳に届いた。

「任務はオード・オートの破壊だ。対象を発見出来なければ、当然呼び寄せる」

「当然って……！」

理屈としては合っているのかも知れないが、それはどう聞いても正気の回答ではない。キールは混乱する頭を叱咤しながら必死に辺りへ聞き耳を立てた。

確かにもうひとりのスクラッパーもこれでこちらの居場所が分かっただろう。問題は、どちらが先にこちらを見つけるか、という事だ。

あの男か。死神か。

世界はどうやら、どこまでも冷たいらしい。程なくそれをキールは知った。

遠く壁の遠吠えに、音が重なる。

ガシャリガシャリと鉄の骨組みの軋む音と、ノイズ。微かな響きだったが、聞き間違えるはずはない。あれはそう、ここで一番初めに聞いた異音だ。

間違いなく、あの時急襲を仕掛けて来た、アレの。

「……くそ……っ！」

キールは銃を握り締めた。

半分は笑いたいような、そんな自暴自棄な気持ちだった。

エリトリアの骨を拾うつもりで乗り込んで、それがどうだろう。

いつの間にかあの化け物オード・オートに対峙しなければならぬ状況になっているなんて、自分は運が悪いにも程がある。

いや、ハナからそんな物はなかったのかも知れない。

もしひとかけらでも幸運を掴んでいたら、きっとこの星には産まれたりしなかった。

——当たり前だったじゃないか。夢も希望もない世界なんて。

安全装置を外して、スライドを引いた。キールの手は震えていた。

「……聞け」

硬い声でそうスクラッパーが言ったのと、サーチライトが彼らの隠れている壁を照らしたのは殆ど同時だった。

少年は自分の心臓が跳ね上がる音をはっきりと聞いた。

——イイイイン……。

短くノイズが響く。ああ、来る。

唐突にグツと肩を捕まれて、キールは小さく悲鳴を漏らした。

「建物の後方だ。走れ、止まるな——行け！」

バンと肩を叩かれ、そのまま倒れるようにキールは走り出した。

ノイズが闇に揺らめく。

後ろにいたスクラッパーが自分と真逆の方向へ走っていった事に、その時やっとキールは気付いた。

キインという甲高い音のすぐ後に、激しい炸裂音が響く。振り返らなくても何が起きたか少年にも分かっていた。

彼らの言う“任務”が始まったのだ。

がりがりと壁に喰らい付く鋼鉄の音を、すぐさま次の爆音がかき消す。鳴り止まない軋む鉄の音が闇の中どこまでも追いかけてくるような、そんな錯覚に囚われてキールは全力で走った。

やはり背中中は酷く痛んだ。すぐさま息も上がって、足が上がりなくなる。だが、止まる事は出来ない。恐怖なのか意地なのか、もう少年本人にも分からなかった。

裏に面した通りが見えた時、一際大きな爆音が響いた。

地面に僅かな揺れを感じるほどの爆発。キールはバランスを崩し、聖堂跡の裏手に出るなりそのまま派手に転んで倒れた。

「いっ……クソッ！」

立たなきや。立って、逃げないと——ああ、でもどこに！ 逃げるための道なんて、どこにあんだよ！

挫いた足を引きずってキールは立ち上がった。星が浮かぶ夜空に、今は激しい戦闘の音が鳴り響いている。スクラッパーは確かに応戦しているようだ。彼女の言葉通り、それがスクラッパーだから、だろう。

そんな人を――仮にそれが任務だから実行したにせよ、命を救ってくれた恩人を――置いてきてしまった。

「……ちくしょう……！」

歪む視界に情けなくなつて、少年はギュツと目を瞑つた。

今泣いても何が変わるワケでもない。

――そんな事くらい知ってる。それなのに涙なんて。逃げろ、走れ。言われた通り。止まるな！

歯を食いしばりキールは駆け出した。そして目の前に現れたそれにぶつかつて、また地面に転げる羽目になった。

「っづう……！」

「お前らバカ過ぎンだろ。照明弾とか、どんだけ目立ちたがりだよ」倒れ伏せた彼の耳に届いたのは、ため息交じりの軽口だった。

それを最後に聞いたのもたかが数時間前だ。なのに何故か、その数時間前が遥か遠い日の出来事のように感じられて、キールは呆然と目の前に立つ男の姿を見つめた。

彼は少年の肩を掴んで、そのままヒョイと抱え上げる。立ち上がったキールはその男の姿をはつきりと確かめて、言葉を詰まらせた。一瞬ののち、少年はこらえ切れず泣き出した。

「ね……姉ちゃん、もう戦ってんだぞ……！」

「知ってら」

黒いマスクを被つたスクラッパーがどんな表情だったのか。星明りでは暗すぎて、知る事は叶わなかった。

包帯代わりの布に包まれた少年の頭をグシャグシャと撫でると、彼は踵を返し、教会の正面へ向かつて走り出す。力強い足取りだった。

「……ツスクラッパー！ 死ぬなよ！」

キールは叫んだ。クライムは後ろ手を振って答え、そしてその姿はすぐ闇に紛れて見えなくなった。

暗い空にはいつの間にか、灰燼が雲のように立ち上っている。夜

の闇がそれを暗い色に染めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9495d/>

Scrap★py

2011年6月17日01時25分発行